

You can do it.

Jump into a new world.

Beyond your imagination!



Time of your life



【編集・発行】
大阪大学 大学院工学研究科・工学部
国際交流推進センター

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 大阪大学
吹田キャンパス バイオテクノロジー国際交流棟1F
E-mail: contact_cia@fsao.eng.osaka-u.ac.jp
TEL: 06-6879-8972 2021年2月 発行



Time of your life

工学部・工学研究科の留学

＼ 知らないと損する /

留学のリアルを
のぞき見!



特集

モナシュ大学
カリフォルニア大学デービス校
夏期研修



CHECK!

三者対談
インターンシップ
カップリング

Special interview

STUDY ABROAD REPORT

理系学生の留学体験談を元に
留学の**Know-how**を学ぶ



Learn from yesterday, live for today, hope for tomorrow.
The important thing is not to stop questioning.

— Albert Einstein.

過去から学ぼう。今日を生きよう。明日に対して希望を持とう。
大事なことは何も疑問を持たない状態にならないことである。

(アルベルト・アインシュタイン)

留学に行ったら「価値観が変わった」「視野が広がった」「コミュニケーションスキルが上がった」
そんな台詞ばかり聞き飽きていませんか？
「結局は文系の学生が」「語学が堪能な人が」…と先入観から遠ざけてしまっていないですか？

では、理系学生にとっての留学ってなんでしょう。
この冊子では、24名の留学経験者をピックアップ。
理系学生が留学してみたらどんな変化が起きたのか、
体験談を通して一緒に辿っていきましょう！

情報は知識ではありません。
実際に赴き、自分自身の目で見て、心で感じとってください。
その道中で発見した欠片は、あなただけの付加価値です。
そしてきっとこれからの人生において、かけがえのない糧となるでしょう。

さあ、あなたはこの4年間でどんな風に過ごしますか？

CONTENTS

- 留学の種類一覧表・・・・・・・・ P4-5
- 留学体験談 ・・・・・・・・ P6-15・P18-24
P26-30・P32-36
- 部局間交換留学の手続き・・・・ P16-17
- 留学中のリアルVoice ・・・・ P25
- 先輩からのアドバイス・・・・ P31
- 英語の勉強方法 ・・・・ P37
- 工・国際交流推進センターの紹介・・ P38-39

あなたに向いている留学プログラムはどれ？

本冊子で紹介している留学プログラムをまとめた一覧表です。各プログラムの項目を見比べながら、あなたの希望に合った留学を見つけてみましょう。ただし、掲載しているプログラムはほんの一例にすぎません。皆さんが参加できるプログラムは他にもたくさんあります。アンテナを張って自分にぴったりの留学にどんどん参加してみましょう。



このマークは工学部・工学研究科国際交流推進センターが主催であることを表しています

短期間で
留学したい人にオススメ



例えば...

海外経験を経てワンランク上に
ステップアップしたい
長期間の留学へ繋がる語学力を
もっと鍛えたい

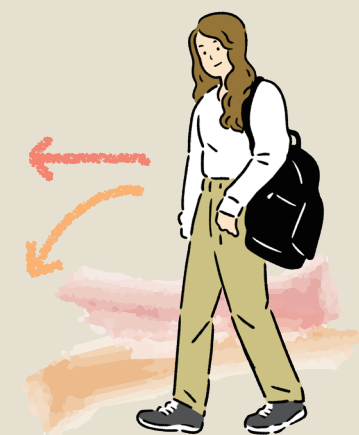


**国際的に活躍できる
力**をつけたい人にオススメ

例えば...

専門分野を生かしながら留学したい

もう一歩先に
挑戦してみたい人に
オススメ



例えば...

半年～1年間の中長期の
留学がしたい
海外のトップ大学に留学
したい

より専門性を
磨きたい人にオススメ



例えば...

海外の学位取得を目指したい

種類	渡航期間	特徴	費用・語学力のレベル 低 ← 高	留学の一例(プログラム名・留学先大学) ※渡航国は本冊子掲載に基づいた記載です	掲載ページ
短期研修	1週間～ 1カ月程度	阪大/民間/政府系など、主催する団体ごとに研修目的や実施期間、渡航国が異なるため、自分の希望に合わせて、選ぶ(探す)ことができる。団体によっては旅費をサポートしてくれる場合もあるが、倍率は高め。予めスケジュールを組んでいることが多いので、個人の自由度は少ない。	¥ ☰	APRU Undergraduate Leaders' Program(アメリカ) 東アジア短期派遣プログラム 欧州短期派遣プログラム(ドイツ、オランダ) 海外フィールドスタディーS(タイ)	P6 P8 P9 P21
夏期研修	1カ月程度	理工系学生に焦点を当てた研修内容のため、ニーズに合った教育を受けることができる。研修に参加すると単位取得可。留学中だけでなく研修の前後に渡り、工・国際交流推進センターが手厚くサポート。短期間で外国語に対するモチベーションUPを目指す。研修生用の奨学金(条件・選考有)支援あり。	¥ ☰	当センター主催! モナシユ大学理工系夏期研修(オーストラリア) カリフォルニア大学デービス校夏期研修(アメリカ) オンライン研修(日本)	P22-24 P24
交換留学	6カ月～ 1年程度	阪大に在籍しながら海外の協定校で勉強や研究をおこなう。留学先で取得した単位のうち、所属学部・研究科で認められたものは、卒業要件単位に参入できる場合もある。留学期間が大学の修業年限に通算されるため、留年せずに卒業も可能。授業料は阪大に納めるため、留学先大学では免除される。	¥ ☰	カリフォルニア大学バークレー校(アメリカ) アーヘン工科大学(ドイツ) リーズ大学(イギリス) テキサスA&M大学(アメリカ)	P10 P12 P14 P15
研究留学	1カ月～ 6カ月程度	教授同士の繋がりを通じて留学する場合が多く、主に所属研究室の教授が共同研究をしている相手先大学の研究室で研究活動を行う。通常、研究のための高い語学力と研究成果が期待される。留学期間や時期、学年は様々であり、旅費は大学がサポートしてくれる場合が多い。	¥ ☰	国立清華大学(台湾) ナント中央理工大学院(フランス) コロンビア大学(アメリカ)	P8 P15・18 P20
博士課程教育 リーディング プログラム	3週間～ 3カ月程度	阪大の博士課程教育プログラム。カリキュラムの中の一つとして、海外研修がある。自身が選択した海外の大学や企業、国際機関等に単身で訪問し、研究活動やキャリア形成をおこなう。旅費は阪大側がサポートしてくれるが、実施計画や渡航手配は全て各自でおこなわなければならない。	¥ ☰	超域イノベーション博士課程プログラム(ドイツ) インタラクティブ物質科学・カデットプログラム(オーストラリア)	P26 P27
インターンシップ	2週間～ 1年程度	海外の現地/外資/日系企業にて一定期間、実践的な職務経験を積むことができる。世界で通用する積極性や実行力、発信力などが鍛えられる。旅費などの奨学金や給与が支給される場合もある。インターンができるだけの高度な専門知識と語学力が参加時には必須。	¥ ☰	カップリング・インターンシップ(東南アジア) ヴルカヌス・イン・ヨーロッパ(イタリア) IAESTE(セルビア)	P32 P34 P36
ダブル・ ディグリー・ プログラム	修業年限のうち 3カ月～ 2年程度	同時期に異なった研究を阪大と協定校で行うことで、学位がそれぞれの大学ごとに取得できる。課程中に協定校へ一定期間留学する必要がある。各大学で異なった修士/博士論文を書き、修論/博論発表も大学ごとに行うため、勉強や研究、生活は多忙。授業料は阪大に納めるため、留学先大学では免除される。	¥ ☰	バンドン工科大学(インドネシア)	P28
大学院進学	1年～	海外の大学院は入試がなく、書類審査(GPA、語学力、CV・エッセイ、推薦書等)にて選考される。英文で論文を書くだけの語学力が必要であることは元より、入学には高いGPAも必要のため、阪大での学士・修士の成績も重要になる。海外の大学、特に欧米の大学は一般的に日本の大学よりも学費が高い。ただし奨学金などのサポートが受けられる場合も。	¥ ☰	ロンドン大学(イギリス)	P30

※本冊子の内容は留学経験者からのインタビューを元に編集した情報のため、留学スケジュール、派遣期間、渡航国、語学力、費用などはあくまでも一例です。
実際に参加される前には必ず、問い合わせ先やWEBサイト等で最新情報をご確認ください。
※表で紹介している、各プログラムの特徴、費用・語学力のレベル等は、編集者が示す指標です。目安程度にご参照ください。

Name 出戸 克尚
Major 工学部
環境・エネルギー工学科



最終プレゼン発表後に、スーツで記念撮影

志と人間性で周囲を巻き込み、
未来の世界へインパクトを与える存在へ

思い立った気持ちを実現するために

私は学部3年の夏に、APRU主催の「Undergraduate Leader's Program 2019」に参加しました。入学時から海外に行くことに興味はあったものの、特に何も準備をせずに過ごしていました。しかし、2年生の終わりに、大学生らしく自由に過ごせるのは後1年だけだと、気付くことが出来ました。工学部では、4年生から研究が開始するため、自分の好きなことを好きな様に出来るのは3年生までだからです。あと1年何をして過ごしたいか考えました。その時、心に浮かんだのは、海外に行くことでした。海外に行くことと決めてからは、工学研究科国際交流推進センターやKOANなどで留学情報を毎日チェックしていました。お金が無かったのも、無料で海外に行けるプログラムが対象でした。そんな中、APRUプログラムを見つけました。場所はアメリカ。プログラム開催時期が7月。授業を2週間以上休む必要があり、期末試験も近いタイミングでした。しかし、このプログラムの参加は、自分の一生に大きな影響を与えると感じたため、学科長に公欠を取ることをお願いし承諾してもらえた結果、APRUプログラムに参加することが出来ました。

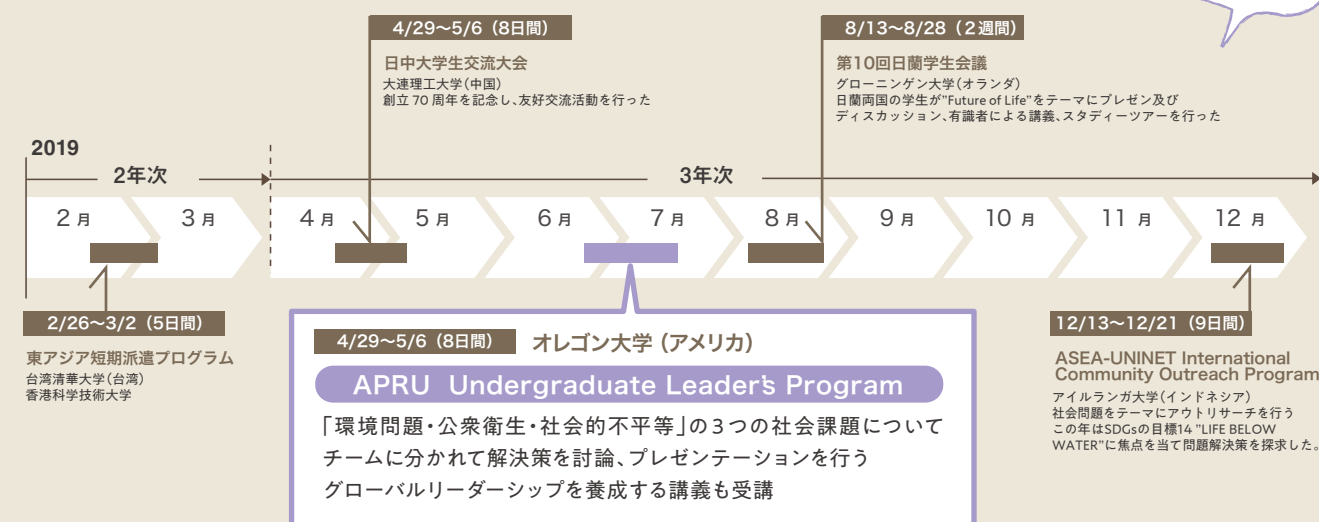
考え方が一変した14日間

プログラムに参加する前は、授業や課題、演習に追われ、英語の練習が全然出来ませんでした。プログラムが始まると、参加者のほとんどが英語を流暢に話し、自分以外のメンバーで盛り上がっている。不安と情けなさで最初の数日は辛かったです。しかし参加者は、世界15ヵ国の有名大学から選抜された70名。優秀で人間性も優れ、チーム意識が強く、「全員で素晴らしい2週間にしよう」という一体感がありました。自分もそんな環境下でいたため、意識を変え、素直に分からないことは分らないと周りのメンバーに伝えたことで他の参加者との距離が一気に縮まりました。バックグラウンドが異なるメンバー全員が主体的に、そして協力的に行動していました。授業でお互いの意見をぶつけ、分からない人を助け、全員から意見を汲み取ることで、より良いアイデアを提案しようと考えていました。毎日メンバー全員で食事をし、夜はスポーツ、パーティー、ダンスなど充実した時間でした。全員が家族のように強い絆で結ばれていることを実感しました。この2週間で自分の考え方が一変しました。大切なことは、「強い意志」と「人間性」。その二つがあれば周囲を巻き込み、自分でも社会にインパクトを与えられることを学びました。

ミニ遠足
大きな川にかかる橋の上で記念撮影授業中にアイスブレイクがあり
そのルール説明を聞いている時プログラム終了後にみんなで揃いの
プログラムTシャツに着替え記念写真

✈ Study Abroad Information

1年間で5回も海外渡航できたよ!



費用の自己負担が
少なかった!

5つの海外渡航すべてにおいて渡航費や滞在費は大阪大学や受入大学、財団などによりサポートをいただいた。その為、自己負担は食費・娯楽費の1~2万円程度に収めることができた。

経験で終わらずに次の行動へと繋げる

APRUを経験したことで、海外により強い関心を持ちました。その関心を行動に移さねば何も変わらないと思い、1カ月後には学生団体の日蘭学生会議でオランダに2週間滞在し、社会課題について英語でディスカッションをしました。また、その後は日蘭学生会議の副代表を務め、新たに国際交流の学生団体「OICU」の立ち上げにも関わりました。そんな中、国際交流活動を通して見えてきた課題感がありました。自身の専門分野である環境問題について日本と欧米で関心に大きなギャップがあることです。欧米では、市民が環境問題に積極的に取り組むことでより良い未来を創ろうとしている。その動きを学生が中心となり、社会全体を動かしていると感じました。この流れに日本も乗り遅れてはいけません。そんな思いから、工学部の「学生チャレンジプロジェクト」で学内のペットボトル削減プロジェクトを立ち上げました。学内の職員の方やウォーターサーバーの企業を巻き込むことが出来ましたが、結果的には最終選考で落選。無力さを痛感した一方で、自分でも周囲を動かし、社会を動かすことが出来る可能性も実感できました。この背景には、理系学生で海外経験を多くしてきた自身の特性にあります。つまり、理系学生で終わるのではなく、社会的な視野や行動力を広げていくことで、自分でも社会で活躍できると気づきました。

そんな中、コロナウイルス感染症の流行で海外に行けなくなりました。しかしこれは、英語学習と並行しながら社会課題解決に向けて社会人と協働の機会を手にするチャンスだと思いました。そして、サッカーの本田圭佑選手も立ち上げに関わった、社会課題解決に取り組む「WEIN挑戦者FUND」という組織に入り、中部地方のリーダーに選ばれました。社会人がほとんどの組織で僕がリーダーに選ばれたのは、理系学生である特異性とこれまでの行動力を評価されてのものでした。研究生生活や英語学習との両立は大変でしたが、充実した日々を過ごしました。

自分の考え方・行動が変わった原点は、APRUでの経験です。大学生活で何もしていない、という焦りから申し込んだAPRU。勇気を出して申し込んだことで、最終的には自分に自信を持つことが出来るようになりました。これからも自身の特異性や行動力を武器に、様々な経験を積み、環境問題の解決に向けて世界中で行動し続けることはもちろんのこと、交換留学などで海外に行き、更に視野を広げたいと考えています。そこで得た学びを他の学生や社会に広げ、周りの人々に還元していきたいと思います。

土日にみんなでキャンパス近くの
アイスクリーム屋さんに行った時の写真

Q & A

Q1 留学に行って変わったことは?

A1 日本を外から見て、日本の将来に危機感を感じました。英語能力だけでなく、国外の問題やその文化的背景への理解が無ければ、世界から置いて行かれる恐怖感を強く感じました。

Q2 渡航前に不安だったことは?

A2 APRUの参加学生のほとんどがネイティブか交換留学経験者だったので、英語力が不安でした。留学中、英語力の圧倒的な欠如を感じたこともあったものの「ためらうこと」の勿体なさを感じ、自由時間に参加メンバーとスポーツや日常会話、ゲームで打ち解け、分からない時にすぐに質問できる環境を作りました。その結果、参加者のうち2週間で最も英語力が上達したメンバーに選ばれました。



Name 花木 愛子

Major 工学研究科
マテリアル生産科学専攻

お世話になった研究室のメンバー

ルームメイトのベトナム人と隣の部屋のアメリカ人と猫空に行った時

私の世界を広げた 最初の一歩

高校生の時から、時間のとれる大学生の間に留学したいなと考えていました。学部2年の頃、何となく生協にあるパンフレットを見ると「留学破格!30万円〜!」と書いてあり、留学ってこんなにお金かかるんや!」と思い大学生の間に留学は金銭的に難しいのかなと諦めていました。留学に関して調べていると、KOANで「海外留学」と書いてあるのが目に留まりました。期間が1週間程度で、費用は大学が負担してくれる研修があることを知り「これなら私でもいける!」と、思い切って応募してみました。その研修は、「東アジア短期派遣プログラム」という台湾・香港の大学を訪問するもので、現地の学生と交流できる研修でした。この研修の参加をきっかけに、台湾の清華大学への留学のお話をいただき、研究留学(2カ月)のチャンスをつかむことができました。この台湾清華大学への約2カ月間の留学も渡航費や宿泊費、授業料を清華大学側で負担していただいたため、親にほとんど負担をかけずに済みました。

台湾留学では、平日は先輩に教えてもらいながら実験をしたり、関連分野の論文を読んだりと日本と同じように研究活動に励み、休日は友人と遊びに行ったりしていました。学部4年の初めに留学したので、日本での研究室生活に慣れおらず、研究のいろはわかりませんでした。そのため、先輩にどんどん質問して自分ができることは何でもやってみようと思って行動していました。



✈ Study Abroad Information

短期研修

国立清華大学(台湾)
香港科学技術大学
2019年2~3月(5日間)
留学時:学部3年生
● 渡航費・宿泊費
(大阪大学が負担してくれた)

研究留学

国立清華大学(台湾)
2カ月間
● 渡航費・宿泊費・授業料
(相手先大学が負担してくれた)

研究成果報告の最終レポートでは、初めて英語で長い文章(A4用紙5ページ程度)を書かなければならぬ大変でしたが、その分成長できたと感じています。研究室のメンバーとはカラオケに行ったり、研究室で教授にばれないようにこっそりお酒を交わしたり(笑)と色々なことをしました。台湾での留学生活から学んだこととしては、何事をするにも周りが動いてくれるのを待つのではなく、自分から動くことが大切だということです。

他にも様々な海外経験を経るうちに、日本にいても留学生の友人ができる機会が増えました。積極的に人と関わろうと思うようになったからだと思います。留学生の友人と将来について話していた時に「ややこしいこと(お金の問題や、今後のライフプラン)について考えて進路を決めるのもいいけど、実際自分が楽しいことをしたいよね。」という言葉に影響され、「自分主体でいいんだ!」と思うようになりました。

きっと海外経験をしていなかったら、「みんなそうやし」、「まあそんなもん」と思って自分の気持ちをあまり重要視せずに、進路を決める人生だったかもしれません。今は自分自身の興味が赴くままに自分の人生を歩もうと思うようになりました。この考え方が結果的にどうなるかはわかりませんが…(笑)

皆さんが思っている大学生の4年間はあっという間です。やりたいなと思ったことは、やっぱやったらよかった…と後悔する前に思い切って一歩踏み出してみてください。「あ、楽しそう」っていう気持ちとちょっとした勇気があれば十分です。

留学当時の思い出話

留学中は4人部屋にベトナム人の方と2人で住んでいたのですが、初めて話したかけた時に「I can't speak English.」と書かれたGoogle翻訳の画面を見せられ、めっちゃくちゃ困りました。ただ、毎日一緒に過ごしていくうちに彼女も英語で会話できるようになって、どんどん仲良くなれて、今でも連絡を取るほどです。
初めはやばい!と思うことがあっても最終的にはなんとかなります!(笑)

Name 山田 俊哉

Major 工学研究科
環境エネルギー工学専攻

“行動力”における パラダイムシフト

私は、「欧州短期派遣プログラム」から、自己決定の重要性、行動力の2つを主に学び、それらが交換留学への挑戦に大きく関係したと感じています。この体験記では、本プログラムによってこれら2つに対する考え方がどのように変化したかを中心に、自分のキャリアプランに与えた影響にも言及したいと思います。

私が本プログラムに参加したのは学部4年が終わる2月です。応募動機は、国外大学の研究設備等を直に見学でき、渡航費・宿泊費など大学からの補助も厚い点に魅力を感じたためです。応募当時、留学への関心はゼロではないものの実際のところほとんど無く、自分が現実挑戦することは無いだろうと思っていました。海外という言葉に対しても、日本と日本以外を一緒に隔てているような印象を持ち、いわゆる海外志向の強い人達に対する反感も持っていました。私には学部生時代に学業を疎かにしていた自覚があり、「あの時こうしていれば」と考えることも多かったのですが、本プログラム参加後は「自分の未来を決めるのは現在の自分であり、過去には戻れなくても今から始めることは可能」と考えるようになりました。留学に関して言えば、私自身を含め多くの理工系学生は英語に苦手意識を持っていたり、研究力を重視する一方で語学力を軽視していたりして、挑戦しない理由を作り上げてしまう傾向にあると思います。実際、交換留学に挑戦する学生は理工系に限らず少数派で、やらない選択は容易です。そのような状況下においても周囲や全体の傾向ではなく、自分に何が必要か考えて選択すること、すなわち自己決定の重要性に気付くことができました。本プログラムから得た経験は、こうした考え方の変化において大きな糧になったと思います。

もう一つ、本プログラムは私に「経験から学ぶ」という点において考え方の大きな変化を与えてくれました。前述した自己決定の重要性は、本プログラムから得た経験から学んだものではありませんが、時系列では経験中ではなく経験後であり、経験後の反芻によって「何を学んだか?」が決まると思います。つまり「海外経験から国際性を学びたい」のように事前に意図や目的をもって経験から学ぶことは難しく、逆に予想外の収穫を経験から得たりもします。だからこそ、まずは糧となる経験を獲得することに意義があり、経験の価値はその後の自分次第で決まるのだと思います。こうした考え方の変化は行動力の変化に直結しました。

グローニンゲン大学にて大学の説明を受ける

アーヘン工科大学の研究室訪問
アーヘンの市庁舎前広場にて

何が得られるかは実際にやってみなければ分からないため、留学に限らず、行動を開始するための精神的なハードルが下がり、結果、行動力が高くなったように思います。以上のような変化から、私は交換留学に挑戦することになりました。交換留学生に内定しスウェーデン王立工科大学への交換留学が確定しましたが、残念なことにコロナウイルス感染症の影響を受けて中止になりました。しかし、その過程における経験からも多くを学ぶことができました。例えば語学力の向上においては「自分に何が足りないか」という自分の内因のみが改善の対象ですが、一方で研究においては条件やコードなど自分以外を対象とします。語学力向上の過程で培った自分と向き合う習慣が、問題発生時に自分を省みたり自己矛盾を洗い出したりする助けとなり、就職活動も円滑に進めることができました。

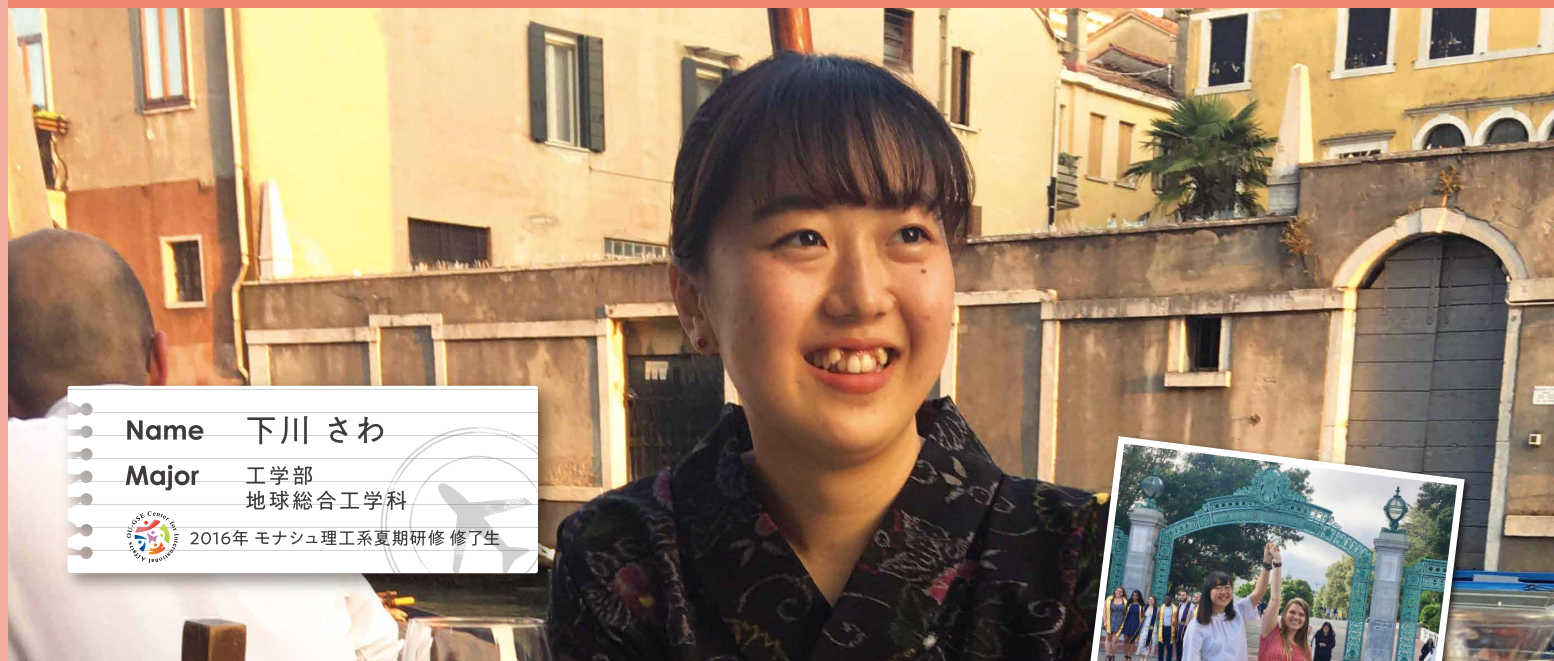
加えて、本プログラムは私の進路にも大きく関係しました。プログラム参加後、私は「日本人として国内外で活躍したい。日本・海外という括りではなく、どんな場所でも日本人らしさを持って働きたい」と考えるようになりました。現地体験を通じて、自分が本質的に日本人であることを痛感したからです。例えば、公共の場での態度、食の好みはもちろん、日本語が聞こえたときに同胞の存在を嬉しく感じるなど、今までに気づけなかった自分の日本人らしさを多く発見しました。国際性やグローバル人材という言葉を安易に解釈して無個性を目指すのではなく、自分の日本的な個性や相手の個性を理解した上で場所を問わず活躍できるような人間を目指しています。



✈ Study Abroad Information

短期研修

アーヘン工科大学(ドイツ)、グローニンゲン大学(オランダ)
2019年3月(2週間)
留学時:学部4年生
● 渡航費・宿泊費(大阪大学が負担してくれた)



Name 下川 さわ

Major 工学部
地球総合工学科

2016年 モナシュ理工系夏期研修 修了生

UCB, Sather Gate
Monster's Universityのモデルと言われる門

「やってみたい」に 突き動かされた4年間の歩み

なぜ人は留学に行くのか？

私が海外に行こうと思った理由は拍子抜けするほど簡単です。「大学が休みの時って何をしているんですか？」と周りの先輩に尋ねた時「バイトして、旅行やな」と返答されたことでした。バイトや旅行は人生のどの瞬間でも割と可能だろうと、心の中で思ってしまったのでとりあえず、大学生の時間があるうちに“経験すべきことっぽい”留学に行こうと決めました。なので留学を決めた時点では、私もなんとなく留学してみたい凡人の一人にすぎませんでした。しかし、こうして学部4年を振り返ってみると、比較的多くの留学を経験させていただいたのだと感じています。

「なぜ留学したの？留学で得られたものってなに？」という問いは、留学経験者ならば必ず聞かれる質問だと思います。Googleで検索すると【語学力の向上／異文化体感／失敗への恐怖心がなくなる／トラブルに対応できるようになった／コミュニケーションスキルが得られた／世界における日本の立ち位置を見直せた／日本の良さ悪さに気づいた】など、様々な体験記を閲覧することが出来ます。そして今時、留学なんて誰でも行きます。私は、個人が感じる“学び”はどんなことだって良いと思いますし、また留学をしない人生を選んだとしても、どこかのタイミングで“留学で得られるとされるもの”を学ぼうと感じています。ただせっかく学ぶのであれば、早いことに越したことはないのではないのでしょうか。そしてもっと大事なことは、なぜ留学に行くのかではなく、留学をどう活かせるかではないのでしょうか。

私自身は根暗な性格も相まって留学に行く度に、何かを達成できた喜びよりも、何かがうまくいかなかった悔しさ残り、次は絶対に成功させたいという思いが、何度も自分を突き動かしていました。

University of California, Berkeleyに決めた理由

交換留学については、英語で土木工学の勉強をしたい、将来の研究テーマを探したい、海外に親友を作りたいという3つの動機で留学を決意しました。

実際に行くことと仮定し、どんな感じなのだろうと詳しく調べていく中で、以下の条件でないと留学したくない(できない)ことに気づきました。それは【留年無し・必修科目も選択科目も単位交換する・給付型の奨学金支援がある・専攻である土木工学の最高峰の大学に行く】です。これはあくまで最低条件で、他にも【政治的にリベラルな地域がいい・天気がいい場所がいい・刺身が食べられるところがいい】などの追加条件を付けていくと、カリフォルニア大学バークレー校(UCB)に自然と決まりました。

UCBへの留学を実現するためには、専攻の先生に相談する一方で、阪大に前例がなかったので、同時進行で“知り合いの知り合い”という見ず知らずの東京の大学の先輩方にたくさん質問をして、どうやったら成功できるのかをいろんな人に聞きました。単位換算に関することは専攻の先生方に、合格するための手段やどのような時間感覚で行動すればいいかなどは、東京の先輩方に教えてもらって実現しました。(UCBには日本人留学生在が30人いましたが、28人はある程度決まった数校の某東京の有名大学に在籍していました。)

硫黄島の戦闘で
使用された米軍の空母

Study Abroad Information

授業を休まないためにも学期休みも
利用しながら海外へチャレンジしていたよ！

2016	1年次	2017	2年次	2018	3年次
夏休み(40日間) モナシュ夏期研修 モナシュカレッジ(オーストラリア) 一般英語とプレゼンテーションを学ぶ研修。 これが初めての海外！	春休み(5週間) TOMODACHI-STEM ライス大学(アメリカ) 理工系女子学部生を対象とした研究インターンシップ。「老朽化した橋の信頼性」について研究指導・ポスター発表を行った。	夏休み(1カ月) 内閣府国際青年育成交流事業(ミャンマー) タケタ橋の建築見学やヤンゴン管区首相に表敬訪問。ヤンゴン工科大学、マンダレー大学の学生と交流活動を行った。	秋(2日間) USJC 年次総会(ワシントン) 交換留学を踏み台にして将来どのような人間になっていきたいかをスピーチ。	夏(16日間) 学生会員海外研修支援事業(イタリア) ヴェネツィアの洪水調査。水害対策を中心とした浸水の様子とラグーンに設置されている水門を見学した。	

2018～2019

3～4年次

交換留学(大学間)

カリフォルニア大学バークレー校(アメリカ)
2018年8月～2019年5月(10カ月間)

履修科目

8～12月「流体力学」「地質学」「Feminist studies」
1～5月「構造力学」「土質力学」「数学解析」「Feminist theory」
ディスカッションや実例を用いた実験など、時間をかけて基礎的な定義自体を理解するという学び方の違いに驚きと面白さを感じました。

費用内訳

- 渡航費: 約17万円
- 住居費: 20万円/月(アパート)
- 生活費: 約4万円/月

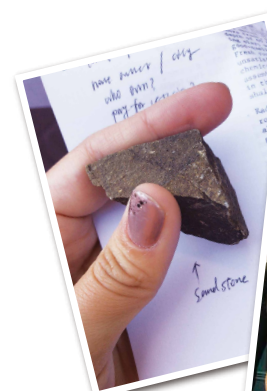
- 奨学金: 約100万円
(日米カウンシル渡邊利三寄付奨学金、大蔵共助会)

UCBの自主研究にて
作成中のトンネル模型

留学に行って変わった価値観

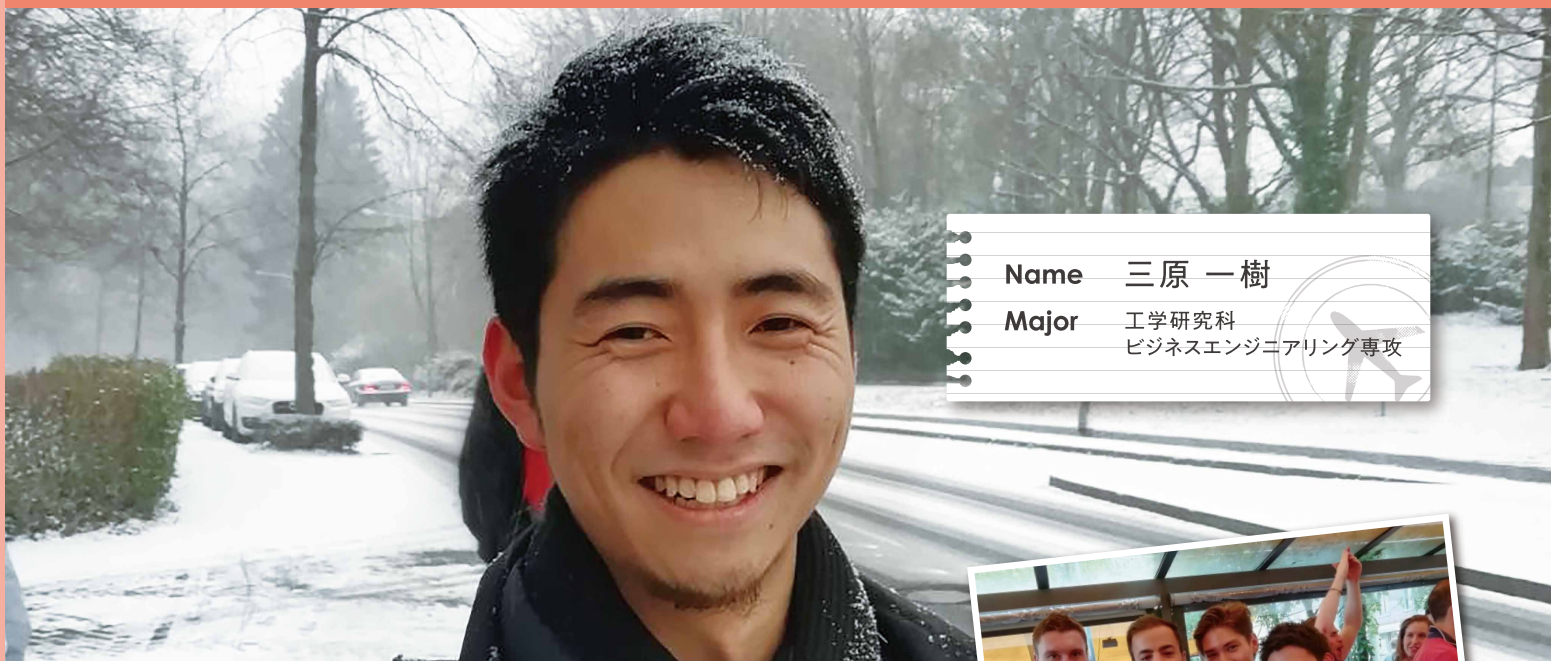
留学という経験を通して変わったことがあるとするならば、「やりたいと声に出すことで自分の思考をまとめられるということ」「やりたいと思って自分で得た情報を踏まえた上で初めてやるかやらないかの判断をすべきだということ」「やりたいと言ったことに対して、経験がないのに否定してくる人や離れる人はそれまでの関係性なので、早めに線が引けてラッキーだったこと」「やりたいことに興味が無くても自分の親友は変わらず接してくれること」「やりたいと言わないと何も与えられないこと」でした。そして考える習慣が自分により深く根付いたことが1番の財産だと感じています。

私は大学に入学するまで海外に行ったことはありませんでした。あの頃の私が描き得る未来は、単位がやばいとふざける青臭い大学生らしさに満足感を見出しながら、程よくサークルで遊んで、流されるままに周りと一緒に大学院入試を受け、インターンのESを出す段階で自分が何も考えてこなかったことに少々痛みながらも、引く手あまたの土木業界に呆気なく就職していたことだろうと思います。

地質学のフィールドトリップ
サンフランシスコ市街を眺める丘の上で地質調査LAにて
全米で勉強する奨学生の集い

留学中の思い出

数こそ少ないが外国に親友ができたこと。双方の歴史問題や世界情勢におけるお互いの国の政府の対応について議論ができる友人は、かけがえのない存在であり、損得なく、一人の人間として話せる時間は今でも非常に大切にしている。また、日本の理系教育はアメリカと比べるとかなり進んでいるので、同年代のアメリカの学部生の授業には余裕でついていけると感じた。勿論与えられた教育に関係なく、高度な理系素養を身に付けている方も多いので、パーティーの際に積分の話で盛り上がったところ「アジア人は酔うとすぐに数学を始めるね」とアメリカ人の友人に呆れられたこともあった。



Name 三原 一樹
Major 工学研究科
ビジネスエンジニアリング専攻



ワールドカップでフランスを応援
(フランスからの留学生が集まっていたのですが、
写真と一緒に撮っているのはドイツ人で、一緒にフランスを応援しました。)

身に染みて感じた 覚悟と援助の大切さ

嫌いな英語の克服

僕は、英語が嫌いでした。高校生の頃は、英語を勉強しろと叱りつける親に対して、「将来は海外なんか絶対に行かないから英語は勉強しない」と反抗するほどでした(ちなみに、センター英語の筆記は7割、リスニングは4割しか取れませんでした)。そんな僕が、学部3年の頃、自分から海外に行きたいと思うようになったのは、高校時代仲良かった友達がカナダでの語学留学をとても楽しそうに話していたからです。そこで話を聞いた半年後、僕もアメリカの語学学校に行きました。念願の海外で気持ちが昂っていたのですが、海外では日本と同じようにいかないことが世の常です。アメリカでのホームステイ先までの迎えなど、日本に居る間に万全に準備をしましたが、向こうの空港についてみると迎えが見当たらず、拙い英語でInformationの方に助けてくれと言ってもうまく要件を伝えることができず追い払われてしまい、英語を話せない聞けない僕はアメリカに来たことを死ぬほど後悔しました。結局通りすがりの女性に助けてもらって何とか帰りました。その後も、色々と問題が発生しましたが、向こうでできた友達など、周りの人々の助けを借りながら対処していくことができたので、楽しく帰ってくることができました。



マイントゥの教会
(画家 マルク・シャガールが手がけた教会です。
ステンドグラスが青くてきれいです。)

交換留学までの道のりと奨学金獲得

帰国後また海外に行きたいという気持ちがあり、情報を探しているとKOANで工学研究科国際交流推進センター主催の「欧州短期派遣プログラム」を見つけました。ドイツ、オランダの大学を訪問し、研究室見学ができるというプログラムで、僕はとにかく海外にまた行きたいという気持ちと、大学から企業へのIoT技術の実装方法について興味があったので、すぐに応募しました。この研修で特に印象深かったのは、大学の技術の移転センターで、組立工場のトレーサビリティ技術の応用研究や、周辺企業のデジタル化コンサルティングの手法などを見学できたことです。そしてこの研修で訪問したアーヘン工科大学に留学をしたいという気持ちが強くなり交換留学を目指す事にしました。

しかし、ここからが大変で、まず長期間留学に行こうとすると、どうしても費用が掛かってしまいます。お金の無い学生にとって奨学金は必須で、ちょうどその頃、「トビタテ留学JAPAN(文科省)」の募集をしていたので、これを利用することにしました。ただし、トビタテの選考では、応募者の留学に対する熱意を見られます。応募者が留学で何をしたいか、そのためにどこまで考えているか、そういったことをきちんと説明できなければ受かることはできません。応募しようと思った頃、何を成し遂げたいかがはっきりと決まっていなくて、悩みました。あれこれ一人で考えても自分の考えを整理することができなかったのですが、過去のトビタテ合格者が周りに居たので、つきっきりで成し遂げたいことを掘り下げてもらいました。そのおかげで、何とか合格しました。次に、奨学金が決まったので、留学先を探そうと思ったのですが、交換留学(大学間)の応募は、すでに終了してしまっていました。自分の力だけではどうすることもできないので、色々な先生方に何度も何度も相談しました。工学研究科国際交流推進センターの先生に相談したところ、部局間の交換留学であれば応募できるということがわかり、先生にアーヘン工科大学と直接やり取りをしていただいて、1年間留学できるようになりました。



Study Abroad Information

交換留学(部局間)

アーヘン工科大学(ドイツ)
2018年4月~2019年3月(1年間)
留学時:修士2年生

インターンシップ

GTT-Technologies(ドイツ)
2018年3月(1カ月間)
インターン時:修士2年生

費用内訳

- 渡航費:10~15万円
- 住居費:3~4万程度/月(交換留学中は大学寮、インターン中はシェアハウス)
- 生活費:3~10万程度/月(自炊をすれば安くなるが、パーティーの回数に比例して生活費は上がる)
- 奨学金:16万円/月+渡航費(トビタテ留学JAPAN)

トビタテ留学
JAPANの
詳細はこちら



後輩へのメッセージ

英語レベルを上げるためには、実は阪大の中でもできることがたくさんあります。一番は留学生の友達を作ることです。僕の場合はまず阪大に來ている留学生と共に授業を受けました。受け始めた頃は一人で孤独でしたが、そのうちよく話す留学生の友達ができ、授業でわからないことも助けてもらいました。また、仲良くなった留学生がイベントに招いてくれることもありました。その他、工学部のイングリッシュカフェのスタッフにもなり、自ら留学生イベントを企画、開催することにより英語で話す事の抵抗感をなくしていきました。

留学生の友達を
たくさん作って
英語力UP!



留学開始時の
チーム対抗オリエンテーション
(チームで街を回って、酒を飲んでポイントを稼ぎます。)

憧れのドイツ生活

留学中は、授業を受けたり、論文を読んだり、イノベーションセンターを訪問したり、教授にインタビューに行ったりしました。おかげで、ドイツらしい合理的な考え方を沢山聞くことができました。例えば、ルールを先に作ってしまえば、ドイツ人はルールに従うので浸透していくといった内容です。一番つらかったことは、授業で発言できないことでした。議論型の授業に参加しているのに、何も発言できないときは本当に焦ります。僕は自分が今までやってきた通り、周りの助けを借りることで何とか乗り越えました。日本に來ている留学生と仲良くなるより難しく、こちらから積極的に話しかけていかないと仲良くなるはなれませんが、ちょっと勇気を振り絞れば困難も打開できます。

この留学のテーマに対する結論としては、「ドイツでは大学や研究所が中心となって、技術を浸透させるハブとなっているが、日本では大学や研究所が中心にはなれていないので、大きな企業がハブとなっていく必要がある」です。それを踏まえた上で、僕は将来的にIoTを日本の中小企業に浸透させることに貢献したいとの想いで、現在は日本の電機メーカーに就職し、FA機器・設備用のIoTパッケージの開発を行っています。

日課のジムでのスクワット
(ほとんど毎日行っていました。
10kg 増量に成功しました。)



大切な事

最後に、留学には覚悟と周りの助けの両方が大切だと僕は思います。覚悟なしに、周りの助けだけ求めても人は助けようとはしてくれません。逆に覚悟だけ決めて、周りの助けを無視してしまうと、いつか躓いたときに立ち上がれなくなってしまいます。うまくいかないときはもう一度、自分の覚悟と周りの助けは十分か考え行動してみてください。



ソフトボールチームでの試合後
(アーヘンのソフトボールチームに所属していました。)



Name 近藤 聡太
Major 工学研究科
環境エネルギー工学専攻

「留学したい」 素直な気持ちを大切に

私は修士1年の8月から1月までの半年間リーズ大学で交換留学をしました。英語があまり得意でなかった私が、イギリス英語に感銘を受けて、今では毎朝BBC radioを聞きながら通勤しています。

交換留学を目指すきっかけとなった転機は、父からの勧めで学部3年に経験した1カ月のロサンゼルスへの語学留学でした。自分の英語コミュニケーション能力に失望する一方で、他国籍の人々と生活に対して、これまで感じなかった刺激や楽しさを感じました。そして、次は、海外の大学で長期間学びたいと思い、帰国後すぐさま交換留学の相談窓口に行きました。その年の8月にIELTSスコアの取得、10月に申請書類提出、研究の調整を経て、翌年の1月には無事交換留学の切符を手に入れました。申請書類の作成にあたっては、工学研究科国際交流推進センターの先生方にアドバイス、添削していただきました。

私の留学したリーズ大学は150を超える国々から多くの留学生が集まっており、非常に国際色豊かな環境でした。授業の予習や課題に追われる日々でしたが、休日はイギリス国内、ヨーロッパ国々を旅行したり、現地のテニスクラブ(グラスコート)に通ったりと非常に楽しく過ごしていました。



✈ Study Abroad Information

交換留学(大学間)

リーズ大学(イギリス)
2017年8月～2018年2月(6カ月間)
留学時: 修士1年生

費用内訳

- 渡航費: 12万円
- 住居費: 8万円/月(学生寮)
- 生活費: 8万円/月



オリエンテーションで
友達作り



大好きなテニスATP finalの観戦

帰国後は、就職活動が待っていました。夏のインターンシップに参加できなかったことは多少不利に働いたかもしれませんが、理系で留学経験ありはもちろんメリットとなり、現在は第一志望先の化学メーカーで楽しく働いています。留学先でも、キャリアフォーラムなど留学生向けの採用活動があり、活用することができます。就職活動後は、卒業まで研究に没頭することができました。

私が最も伝えたいことは、留学(主に交換留学)は特別なことではなく決意できたら誰でも実現できるということです。もちろん、乗り越えないといけないハードルはいくつかありますが、どうにかかります。私の体験談を通して、皆さんの不安が解消されて、皆さんの考えるハードルと実際のハードルの乖離が少なくなると嬉しいです。

後輩へのメッセージ

- 学部4年生の研究室配属の時から指導担当教員には留学したい旨を伝えておく、履修や研究計画などを相談しておく。
- 就職活動は春からでも十分間に合うが、6、7月帰国は出遅れてしまうのでお勧めできない。
- 大学院で交換留学したが、学部生で交換留学していれば、海外の大学院へ行っていたかもしれない。早いほど、その後の選択肢を増やせる。

指導担当教員には
早めに相談しておくのが
ポイント!



Name 内平 将
Major 工学研究科
地球総合工学専攻

講義を受けている様子



インターンシップ生の集合写真

失敗しても挑戦し続けた留学、 海外インターンシップ

学部1年の時のシンガポール旅行で海外に興味を持ち、将来は海外で働いてみたいと考え、そのために留学に挑戦しようと思いました。交換留学に行こうと思ったのですが、英語のスコアが足りず、挫折を経験しました。しかし、毎日1時間の英語の勉強および阪大のEnglish Café, Suitalに参加、国際交流科目の受講で留学生と交流する機会を多く作り、留学生の友人を多く作ることで楽しみながら英語力を向上させることができ、その甲斐あって、学部4年でフランスに研究留学、修士1年でアメリカに交換留学、修士2年でノルウェーへインターンシップに行くことができました。

フランスへの研究留学は指導担当教員の繋がりで行くことができ、現地で卒業研究を行いました。交換留学は幅広い知識を身に付けるため理工系ではなく国際学を学びたいと思い、様々な人種が共存しているアメリカを選びました。国際関係入門、文化論、人類学、アジアの性差別など様々な授業を受講しました。授業の中でディスカッションやプレゼンテーションが多くあり、なかなか発言できないこともありましたが毎日一回は発言するよう努力したことで少しずつ慣れていきました。

ノルウェーのインターンシップは企業から日本財団を通して日本の船舶関係の大学へ公募があり、採用され、「海洋空間での水素を活用した事業の提案」という課題に海外の学生13名と約2カ月間取り組みました。

留学・インターンシップを通しての成果は、自分の考えを日本語でも英語でも人に聴することなく、表現できるようになったことと、様々な価値観を持った人々と出会えたことです。彼らとともに過ごした時間で自分も成長でき固定観念に縛られることなく自由な発想を身に着けることができたのではないかと思います。就職は日本だけでなく海外でも働ける先を探し、官公庁は海外駐在のチャンスがあるということで入省しました。

失敗を乗り越えるまで

学部2年の夏にTOEFLを受検するもスコアが取れず交換留学の申請できず(TOEFL 52)。3年の7月にTOEFLを受検するも64点とスコアは取れず、IETLSに移行し3年の9月に受検するも5.5バンド惜しくもスコアが取れず。4年の4月頃にフランスに研究で留学できることが決まったため、英語の受検は終了(フランス留学については英語のスコア等必要なし)。4年にフランス留学後、さらに海外経験を積みみたいと再度修士1年の夏にIELTSを受検し、6.0バンドを取得し、交換留学に応募し、合格。



✈ Study Abroad Information

研究留学

ナント中央理工学大学院(フランス)
● 渡航費: 20万円
● 住居費: 7万円/月(アパート)
● 生活費: 5万円/月
● 奨学金: 13万円/月と渡航費(大阪大学が負担)

交換留学(大学間)

テキサスA&M大学(アメリカ)
● 渡航費: 15万円
● 住居費: 5万円/月(寮)
● 生活費: 5万円/月
● 奨学金: 20万円(一般財団法人大蔵共助会)

インターンシップ

DNV・GL(ノルウェー)
● 渡航費: 25万円(米国からの往復)
● 住居費: 5万円/月(アパート)
(格安アパートでなければ通常は8万円程度かかる)
● 生活費: 8万円/月
● 奨学金: 渡航費(日本財団)
● 給与支給有



大阪大学交換留学制度とは

交換留学とは、本学が海外の大学と締結している授業料不徴収の学生交流協定に基づく、1学期以上、1年以内の留学のことです。大学と大学で締結しているものを『大学間協定』。学部や研究科単位で締結しているものを『部局間協定』といいます。（1学期とは大阪大学の学期ではなく、各協定校の学期を示しています。クォーター制（4学期）、セメスター制（2学期）かは、国・地域、年度によって異なります。）

POINT 1 授業料

在籍大学に授業料を納めることで、留学先大学の授業料が免除されます。

POINT 2 留学期間が大学の修業年限に通算される

交換留学の場合、留年せずに標準修業年限内での卒業も可能です。

POINT 3 単位互換

留学先で取得した単位のうち、所属学部・研究科で認められた場合に限り卒業要件単位に算入できます。

部局間交換留学のロードマップ

※「協定部局」とは、工学部・工学研究科と交流協定（および学生交流に関する覚書）を締結している海外大学のことをさしています。

留学の目的を明確化

- Why?** 留学先で何を学びたいのか？
なぜ留学したいのか、留学後の進路や就職のイメージを具体的にしていましょ。
- Where?** 留学先の国・地域、大学は？
工学部・工学研究科と部局間交流協定を結んでいる大学をまずは知りましょ！
協定校リスト：<https://www.eng.osaka-u.ac.jp/ja/international/international/>
- When?** 留学する学年、時期、期間は？
留学期間によって卒業時期が変更する可能性があります。保護者や指導教員と相談をしながら、留学終了後の大学院入試や就職活動などの将来設計をしっかりと考えていましょ。
- How much?** 留学にかかる費用は？
留学費用は、派遣期間や渡航先によって異なります。どんな奨学金があるか必要であれば調べましょ。

詳細はこちら



事前準備 留学を実現するまでには、学業計画や申請手続きなどの事前準備が重要になります。下調べをしっかりと行いましょ。



問い合わせ先

工学部・工学研究科
国際交流推進センター(C.I.A.)

E-mail: contact_cia@fsao.eng.osaka-u.ac.jp



QRコードを読み取ると
メール画面になります。

「興味はあるけど…」
「何をすればいいかわからない」と悩んでいる方は
まずはC.I.A.で留学相談してみよう！

STEP 1

留学開始
1年～1年半前

STEP 2

留学開始
9カ月前

STEP 3

留学開始
7カ月前

STEP 4

留学開始
2～4カ月前

留学スタート！



渡航の準備

留学決定後、出発に向けた準備を行っていきましょう

- ・ビザの取得
- ・航空券の手配
- ・留学先での宿舍手配
- ・健康診断の受診
- ・海外旅行傷害保険への加入
- …など

学内手続き

- ・留学願、海外渡航届の提出
- ・OSSMAへの加入
- ・危機管理オリエンテーションへの参加…など

留学先部局への申請

学内選考に合格すると派遣候補者として内定します。工・国際交流推進センターからの指示に基づき、協定部局へ出願申請を行いましょう。正式に受入が決定すると協定部局から受入許可通知が届きます。

※受入許可通知を受領するまでは、留学が正式決定している訳ではありません。

奨学金

必要に応じて留学助成金や奨学金へ申請しましょう
(大学HPやKOANをチェック)

学内申請の方法(部局間交換留学の場合)

申請の流れ

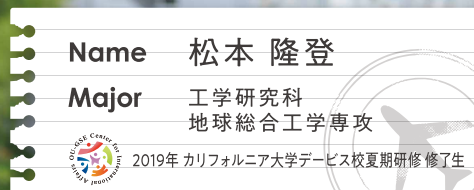
- ①募集要項及び応募用紙を工・国際交流推進センターのHPより入手
URL: <http://www.fsao.eng.osaka-u.ac.jp/overseas/>
- ②申請書・その他の必要書類を揃えて、工・国際交流推進センターに提出
(応募期限は留学開始時期から逆算して原則9カ月前まで)
- ③工学部・工学研究科にて学内選考[書類審査・面接]を受ける
【備考】部局間交換留学と大学間交換留学の併願は可能。
※ただし応募方法や申請時期は部局間交換留学とは異なるので注意。

詳細はこちら



重要ポイント

- 【応募要件】 協定部局ごとに決められた留学資格、学業成績、語学力を満たす必要があります。留学希望先を決めたら要件を工・国際交流推進センターへ照会しましょう。
- 【応募時期】 協定部局によって留学開始時期が異なります。自分の希望校に合わせて学内申請を行いましょう。
- 【申請書】 クラス担任、又は指導教員から必ず承諾を得ましょう。
- 【単位互換】 所属の学科・専攻の教員と相談しながら履修計画をしましょう。
※留学先で修得した単位のうち、学科・専攻で認められた科目のみ単位互換が認められます。すべての単位が認定できるわけではないので注意。



人生の質は出会いの質、 世界に飛び出して気付いたこと

留学を志すきっかけとなった武者修行

私は大学入学当初ラクロス部に入り、全国制覇を目標に毎日練習に励んでいました。しかしそんな最中合宿中に全治3カ月の大怪我をしてしまいました。リハビリを試みるも怪我による恐怖からラクロスを続けることができなくなり、学部1年の途中で退部を決意しました。入学当初から部活に入ることを決めており、サークルの新歓に行っていなかったのでもうそこからはサークルに入ることも考えられず、パツとしない日々を送っていました。そんな時に、高校の同級生から「武者修行(株式会社旅武者)」という海外インターンシップに誘われ、一念発起で2週間ベトナムにビジネスを学びに行きました。何気なく参加した武者修行には、世界で勝負することを志した同年代の人々が集まっており、そういった人々と活動を共にする中で多くの刺激を受け、自分もそうなりたくて強く思うようになり、在学中に留学に行くことを決意しました。



武者修行に参加したメンバーと

しかし、工学部に所属していた私には留学を実現するに当たって2つの大きな障壁がありました。単位と費用です。そこで私は履修案内を熟読し、学年を下げずに長期間の留学に行くための履修計画を立てました。幸いな事に長期休暇を含め受講可能な授業を全て履修すると、3年生の前期が終わる時点で卒業に必要な単位の殆どを取得することが可能である事に気付きました。(恐らく他学科でも3年生の後期に必修科目がなければ可能だと思います。)そして単位を早期習得した後に、その旨と留学への想いを所属しているコースの先生に伝えに行き、著名な大学を紹介してもらえないか、奨学金を獲得できないかの交渉を行いました。その結果、フランスで最も自身の専門である船舶海洋工学の有名な大学へと推薦して頂けることとなり、半年間の研究留学を実現しました。

世界に飛び出すことで見えた景色

留学中は大学においては英語でプレゼンテーションを行ったり、数学や物理学を系統的に学習しました。休みの日には、欧州諸国8カ国をバックパックで旅をして回りました。年越しをスペインのバルセロナで過ごしたことが一番の思い出です。また留学以前に国土交通省のインターンシップに参加していたことから、(パリに位置し船舶の世界的な運航ルールの作成を行っている国際機関である)OECDで働かれている方を紹介頂き訪問しました。世界の最前線で活躍している日本人の方と直接お話しする初めての機会だったので、多くの衝撃を受けたことを今でも覚えています。また共同キッチンの学生寮に住んでいたことから、夜ご飯は世界中から集まった学生と一緒に作ったり食べに行ったりしていました。普段は他愛もない話をしていたのですが、時折世界で起こっている問題や日本の抱えている課題について意見を求められました。



寮の友達



Study Abroad Information

研究留学

ナント中央理工大学院(フランス)
2017年9月~2018年2月(6カ月間)
留学時:学部3年生

費用内訳

- 渡航費: 9万円
- 住居費: 2.7万円/月(学生寮)
- 生活費: 4~5万円/月
- 保険料: 3万/月

- 奨学金: 72万円 (Erasmus+)

奨学金のおかげで
まかなえた!

中でもウクライナ出身の友達から北方領土問題について尋ねられたことを鮮明に覚えています。しかし留学に行くまで理系科目にしか力を入れて来なかった私は、英語力もさる事ながら北方領土問題に対して自分の意見を持ってお答えすることができませんでした。このことから、帰国後は世界や日本の事についてもっと勉強しようと心に決めました。

帰国後は、「数中塾グローバル寺子屋」という団体の活動に力を入れて来ました。数中塾とは元外務事務次官をされていた数中三十二先生が開かれている私塾であり、月に一度全国から集まった学生・社会人の方々と国内外の多岐に渡る問題について議論を行っています。フランス留学を契機に世界情勢への探究心が深まり、種々の事柄に対してしっかりと自分の考えを持ち、論理的に主張できるようになりたいという思いから、帰国した学部4年の始めに選抜試験を受け入塾を果たしました。その後は北朝鮮問題、Brexit、原子力発電とエネルギーミックスなど様々な題材を元に議論を行って来ました。また年度の終わりには活動の集大成として公開イベントを開催し、250人を超える人々の前で「米中対立と日本」をテーマに公開討論を実施しました。



共同キッチン

後輩へのメッセージ

自分の今いるコミュニティを大切にしつつ、本当に自分がしたいことが何かを常に自問自答していくことが大切だと思います。周囲に何となく合わせて履修を組んだり大学院に進学するのではなく、自分で考え納得感を持って進んで行くこと、そういった日々の積み重ねが納得のいく進路決定、人生設計に繋がっていくと思います。

Q&A

Q1 留学の準備段階で心が折れそうになったこと、またそれはどのように持ち直しましたか?

A1 応援してくれそうな人にかく頼りました。相談をする人によっては、「留学なんて凄なお金がかかるし不可能だ/理系で行って何の意味があるの?」と否定的な意見を言われることもあります。なので、前向きに一緒になって実現に向かっての話をしてくれる人に相談することをお勧めします。

Q2 渡航前に知りたい情報はありましたか?

A2 留学先の日本人コミュニティです。海外先では日本人と居たくないと言う人が多いと思うのですが、事故や体調不良等万が一の時に頼れる人がいることは非常に重要だと思います。(実際にフランスで体調を壊し病院を受診した際に、友人にフランス語の通訳をお願いしました)

アトランティック造船所
およびワイン工場に見学に行きました

グローバルな視点を大切に

フランス留学、数中塾グローバル寺子屋での経験から世界を俯瞰する視点に気付き、これを大切にしたいと思うようになりました。また、この視点を持ったビジネスパーソンとして国を超えて様々な人々を巻き込み協働することで、世界に対し価値提供を行いたいという思いから、卒業後は商社マンとして働くことにしました。

具体的には、洋上風力発電を始めとする新エネルギー事業に従事し、その開発支援・電力の小売販売等を通じて、世界のエネルギー問題解決の一助となるべく働きたいと考えています。

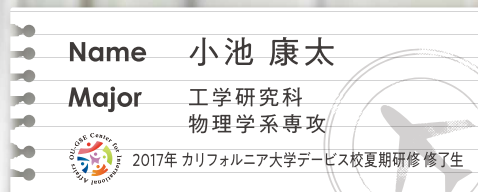
この6年間の学生生活を振り返ってみると、非常に多くの人々との出会いに恵まれ、その方々の助けのお陰で納得のいく進路決定をできたと感じています。自分のいるコミュニティから飛び出すことは非常に勇気のいることですが、いざ飛び出してみると想像もしていなかったような世界・新たな出会いが広がっているので恐れず挑戦してみてください!



グローバル寺子屋

研究留学以外にも日中大學生交流大会に参加したり超域のBasicコース履修生になったりと複数のプログラムに参加することで多方面で活躍しました!





Name 小池 康太

Major 工学研究科
物理学系専攻

2017年 カリフォルニア大学デービス校夏期研修 修了生



コロンビア大学の
Columbia University Visitor Center
涼しい日は、写真のベンチに座って
キッチンカーで買った昼食を食べていました

ジャパンビレッジの壁画
壁画はニューヨークの町じゅうに
あるので 歩いているだけで
楽しい気分になりました

全米トップ大学への 研究留学

博士1年目に米国コロンビア大学への研究留学推薦のお話をいただきました。もともと留学先の研究室と私の所属する研究室は、共同研究で繋がりがあり、指導教員の教授を通して紹介していただいたという経緯です。

コロンビア大学はマンハッタン・セントラル・パークの北側に位置しています。大学近くの家賃相場は高いため、Airbnb(宿泊施設・民宿を貸したい人と借りたい人を繋ぐwebサービス)を使い、郊外のクイーンズやブルックリンの5軒以上の家を転々としながら留学生活を送りました。平日は、朝8時に家を出て地下鉄を乗り継いで1時間ほどかけて大学へ通い、夜8時ごろに帰るという毎日でした。研究活動としては、コロンビア大学のラボで新たに導入した最新実験装置の性能評価を、私がメインとなり行いました。装置に問題があった時や想定外の結果が出た時は、自身で原因を考えつつも、カリフォルニアの装置開発エンジニアと何度も長時間通話をしながら問題の解決に取り組みました。慣れない環境でしたが、しっかり役割を果たせたと思っています。

休日は、近所を散歩しながらお気に入りのドーナツショップやアジア料理店を見つけたり、観光スポットに出かけたりすることで意識的にリフレッシュしていました。11月末の感謝祭休暇には、ワシントンDC近郊のメーランド大学でポスドクとして研究しているイタリア人の友人にも会いに行き、パーティや観光を楽しみました。

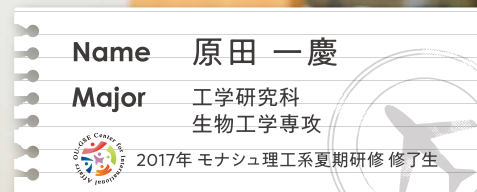
2月には、サンフランシスコで行われた学会で口頭発表する機会をいただき、東海岸から西海岸へ移動しました。1週間ほどの滞在中に、合間をみて近郊のカリフォルニア大学パークレー校のキャンパスも見学しました。

研究、学会発表や海外の研究者との交流など様々な経験を積み、留学をまもなく終えようとしている3月中旬に、ニューヨーク市でコロナウイルスの感染爆発が起こりました。帰国まであと2週間ほどというタイミングで、研究活動がストップしたため急ピッチでラボの学生に装置の引き継ぎを行いました。各国での入国制限も始まるなか予定より1週間ほど帰国を早め、ラボの学生からもらった貴重なマスクとゴーグルをつけて何とか日本行の飛行機へ乗り、帰国することができました。

博士課程では、学部・修士学生にはできないような経験を積みたいという想いがあり、海外での研究は、憧れというよりは現実的な目標のひとつでした。帰国後の現在は、留学中に使用していた装置や実験経験を参考に、より高いパフォーマンスを有する装置を自ら開発しています。今回の留学の経験によって今後の進路にどのような影響があるのかまだ見えていませんが、博士課程修了後の仕事については、自分自身の興味関心を第一優先にしつつ、社会にどう貢献できるか、どんな社会を創っていききたいか考えながら決めていきたいと思っています。

留学中の心構え

気持ちの上下は仕事のパフォーマンスに悪い影響が出るので、研究や仕事においては淡々と目標に沿って行くと決めている。何か問題が起きた時には少々落ち込むが、他の学生や外部のエンジニアに早急に相談して解決できるように努めた。



Name 原田 一慶

Major 工学研究科
生物工学専攻

2017年 モナシュ理工系夏期研修 修了生



研究室のメンバー達

行重しな臆病な自分からの卒業、 海外志向の向上

私の親は、日本国内に留まるよりも海外に出て様々な考え方や価値観を吸収すること望んでおり、将来は海外に出ることを積極的に勧めてくれていました。しかし、私は海外に対して日本語が全く通じない異世界のようなイメージを抱いており、不安から来る抵抗感が潜在意識にありました。そのような抵抗感を持ったまま学部3年の時に初めてモナシュ研修への留学のことを知りました。しかし、潜在意識にある抵抗感が邪魔をし、参加に一步踏み出せていない状況でした。行くべきなのは間違いない、けど行ってずっと一人で閉じこもってしまったらどうしよう、そんな葛藤を抱え悩んでいました。しかし、もしもここで留学に参加しなければ、この先もこの抵抗感が拭えず、海外に出ることに意欲的にならないのではないか？それは凄く勿体無いことだし、嫌だなと思い出しました。そして、一步踏み出してモナシュ研修への留学に参加することにしたのです。

いざ留学に行ったのはいいものの、やはり最初は楽しいと思えるものではありませんでした。自分の想像以上に早いスピードの英語で話しかけられ、返答を求められたとしても英語が全く出てこない。会話が出来ないために、現地の友人を作ることが出来ませんでした。そうした現状に苦しんでいるうちに、自分の留学生活を楽しめるものへと変えてくれる転機が訪れました。それは、日本語の授業を受講している現地の学生に講師として日本語を教えるという授業に参加したことでした。そこで知り合った学生は日本文化に興味があり、他言語を話す大変さを理解してくれています。そのために会話をする時も、拙い英語でなんとか話そうとしている自分に対して理解しようとしてくれ、英語が聞き取れなくて聞き返したとしても嫌な顔一つせずに繰り返して話してくれました。そして、お互いの文化に対して興味があることから、会話も尽きず自然と仲を深めて行くことが出来ました。その友人達と話をしているうちに、次第に英語を話すことが楽しいものになっていきました。自分が成長できているという実感を得られたことが何よりも嬉しかったです。そして、モナシュ研修でのこの経験が自分の海外への抵抗感を払拭し、もっと海外に出てみたいという気持ちへと変えてくれました。

私が所属する専攻では、修士1年の夏に約1カ月半の現地の研究室で研究をする海外フィールドスタディSというものがあります。

モナシュ研修以降、海外へ行っていなかったためにこの話を聞いた時は、抵抗なく直ぐに参加を希望しました。タイへの留学ではモナシュ研修の経験が凄く活かされていたと思います。英語を話すことに対する抵抗が消えているために、自分から積極的にコミュニケーションを取ることが出来ました。現地の研究室のメンバーだけでなく、自分の寮の受付でアルバイトをしていた学生などとも友人になることができ、モナシュ研修の時以上に充実した生活を送ることができました。

私は大学生生活で経験した2度の留学から、海外という環境で色々な人と触れ合う楽しさを覚え、将来は海外で働く機会を持ちたいと考え、海外で働くことができる環境が整っているということを第一の軸、自身の専門に関係することを第二の軸とし、自身の経験を存分に発揮して就職活動を行った結果、外資系の食品メーカーから内定を頂くことができました。



✈ Study Abroad Information

研究留学

コロンビア大学 (アメリカ)
2019年10月～2020年3月 (6カ月間)
留学時: 博士1年生

費用内訳

- 渡航費: 18万円
- 住居費: 12～15万円月 (Airbnb)
- 生活費: 10万円/月 (食費、通信費、交通費を含む)
- 奨学金: 25万円/月
(国立研究開発法人科学技術振興機構)



✈ Study Abroad Information

短期研修

モンクット王トンブリ工科大学&カサセート大学 (タイ)
2019年8～9月 (5週間)
留学時: 修士1年生

費用内訳

- 参加費: 約22万円
- 滞在費: 現地大学が寮やアパートを用意
- 奨学金: 約14万円 (JASSO)、約2万円 (大阪大学)

<海外フィールドスタディSとは>
大阪大学生物工学国際交流センターが主催している夏期短期派遣プログラム。タイのモンクット王トンブリ工科大学、チュラロンコン大学、カサセート大学、マヒドン大学のいずれかを訪問し、自身の研究計画に基づき、バイオテクノロジーに関してラボでの実習を中心に研修を行う。各学生が海外において自らの専門性を発揮するための基礎的な力を養うことを目的としている。

モナシュ大学 (学部生向け)

海外留学の出発点として位置付けられた学部生向けの理工系夏期研修
今後必要とされる英語力の向上を目的に、
グローバルな社会で活躍できる人材を目指します



世界美しい図書館とも
いわれるビクトリア図書館が
キャンパスの近くに
無料Wi-Fiも完備、
放課後の宿題はここで



ホストファミリーとお別れする前に撮った一枚
この写真を見ると温かく受け入れてくれた
家族との和やかな時間を思い出します

背中を押してくれた父の言葉

4月の新入生説明会でもらったチラシを見て「海外、楽しそう」という単純な気持ちから、モナシュ研修に興味をもちました。一方で入る部活やサークルを決めてから、2年や3年になってから、参加してもいいのではないかと悩んでいましたが、父親に背中を押されたのがきっかけで参加を決めました。

メルボルンの人はとっても気さく

留学中に印象的だったことは、現地の方が映画館や電車内で気さくに話しかけてくれることです。日本で、公共の場で見知らぬ人と他愛もない会話をすることがなかったので印象深かったです。



Name 矢野 隆
Major 工学部
環境・エネルギー工学科

オーストラリアの文化 カンガルー肉!? シャワーは5分?

ホームステイ先での思い出としては、ホストファミリーが私の誕生日を祝ってくれたことです。オーストラリアでは庭がある家庭が多く、そこでバーベキューをしてくれました。その時に人生で初めてカンガルーの肉を食べたのですが、絶品でした。二つ目は、水の利用制限が厳しいことです。例えば、私のステイ先ではシャワーの利用は5分まででした。これは、日本ほど降水量が多くないオーストラリアならではの文化で、世界には様々な自然条件が存在することを頭だけではなく、肌で感じた出来事でした。インターネットや地理での勉強で、ある程度知っていたことでも、実際に経験することと印象がだいぶ異なると感じることができました。

もっと長期で海外に行ってみたい!

留学の成果として、日米学生会議の参加や在大阪アメリカ総領事館でのインターン、English Cafe スタッフとして留学生と交流するなど、研修の経験を次の行動に繋がれたことです。また自分が体験、見聞したことがないことで溢れた環境で、1カ月過ごしたことで、もっと長期で海外に行ってみたいという感情が湧き上がったことが大きかったです。もちろん国内でも発見で溢れていますが、海外はさらに発見が溢れていると思います。

先輩おすすめアクティビティ!

- ★ 聖バトリック大聖堂
聖堂の荘厳さに驚かされました。
神社やお寺しか知らない人はぜひ一度!
- ★ グレートオーシャンロード
美しい海岸とインド洋の壮大な景色に
出会えます。道中では野生のカンガルーに
出会うことも。
- ★ メルボルンの王立植物園
園内では放飼されている黒い白鳥に出会えます。
奈良公園の鹿のように、人間にとっても懐いています。



2ショットを撮ろうとすると
噛まれそうになりました(笑)

特集



夏期研修

工学部・工学研究科国際交流推進センターでは学部、大学院生向けの夏期研修を実施しています。研修に参加することで単位も修得できます。大学主催のプログラムなのでサポートが手厚く、安心・安全!初めての海外の人という人にもオススメ。



詳細はこちら

研修内容は次のページに

Let' GO!

固定概念がガラッと変わった

企業見学や研究室訪問では、考え方や意識の違いに圧倒されました。現地の人たちは本当に自分のやりたいことがあって、それを恥ずかしがることなく仲間と共有し、切磋琢磨しているように見えました。日本ではどうしても世間的な「正解」がみんなの中あって、それ以外のことは言いづらいしやりづらいという環境がある気がします。この経験があったから、自分が本当は何がしたいのかを考えるようになったし、目標に向かって頑張っている人を心から尊敬できるようになりました。

授業では学べない英語

現地では、テニスを通して交流の輪を広げました。Facebookで見つけたテニスサークルのページに投稿すると歓迎してくれてほぼ毎日放課後に参加していました。特技を生かして現地で多くの友達ができ、より「生きた英語」に触れることができました。



テニスメンバーとのワンショット

自分の研究を伝えるスキル

プレゼンテーションの授業で先生から分野外の人にも理解してもらえるように指摘してもらったり、他の人の発表を聞いたりすることで、今まで気づかなかった視点から自分を見つめる機会になりました。相手に分かりやすく伝えられる力が身についただけでなく、伝えたり教えてもらったりすることが楽しいと思えるようになりました。



修了式にて、デービスの先生と

海外で働く日本人の姿をみて

今回の留学を経験し、以前から抱いていた海外で働いてみたいという気持ちはより大きくなり、チャンスがあれば先のことを考えずに掘みたいと思うようになりました。こう考えるようになったのは、留学先で見た働く人たちがいきいきして見えたからだと思います。働く時間ではなく、ノルマの達成が重視される環境だからこそ、趣味や家族との時間をより楽しむことができるのではないかと思います。

ネットワークの繋がりを知る

一緒に参加した日本人学生も含めて自分の専門分野以外の人と関わる機会がたくさんあり、自分が知らなかっただけで実はいろんな分野が繋がっていることを知りました。そして、特にこれからの時代はその繋がりが新しいものを作り、社会をより豊かで便利なものにしていくと実感しました。自分の専門分野だけでなく、より広い視野で考える姿勢を大切に、人や社会に貢献する研究がしたいという夢を実現させたいです。

プレゼンスキルは才能じゃない

プレゼン能力の差は生まれ持った才能の違いだと思っていましたが、それまでの準備の差だと気付かされました。人に興味を持って聞いてもらえるプレゼンにはどんな要素があるのか、を論理的に紐解いて教えてもらえるので理系学生ならすぐに理解することができると感じます。発表練習では、現地の先生にいつでもマンツーマンで指導してもらうことができます。またモチベーションを上げるのが上手な先生だったので常に向上心を持って取り組むことができました。現地で作ったスライドを就職活動の研究紹介で使用したとき、良い評価を得ることができたので、プレゼンスキルを学んで損はないなと改めて感じました。



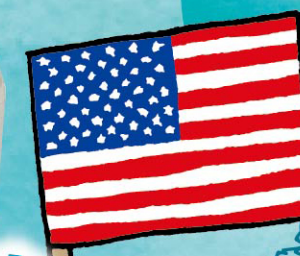
UCBの学生と一緒にWord Cafeをしました



Name 平野 花咲
Major 工学研究科
物理学系専攻

カリフォルニア大学デービス校 (大学院生向け)

理工系大学院生向けのプレゼン力向上に特化した夏期研修プログラム
授業以外にも現地学生との交流やシリコンバレー企業訪問などを通し、総合的な国際力の獲得を目指します



Name 樋口 菜穂子
Major 理学研究科
生物科学専攻

Monash 研修内容

現地の授業

Monash English

世界中から集まる留学生と共に一般英語を学ぶ国際クラス。参加者自身の英語力に基づきクラスが分けられる。ディスカッションなどインタラクティブな授業を中心に4技能を総合的に伸ばす。半日授業なので放課後は観光やカフェ巡りも楽しめる。

Customized Program

阪大生のために用意された特別クラス。プレゼンテーションやポスター発表などの方法について学ぶ。それ以外にも理工系施設へのサイトビジットや、現地学生との交流アクティビティもあり。モナシュ大学のキャンパスで受講するため、学内イベントに参加でき、現地大学生と友達になるチャンス！

Point

- モナシュカレッジは留学生の受入体制が整っており、日本人スタッフもいるため、いざという時に安心。
- 渡航までの手配はセンターが手配するので、煩雑な手続きの必要なし。
- 阪大内での事前・事後研修と現地講義が連動したカリキュラムなため成果が定着しやすい！

授業風景の様子



現地のロケーション

キャンパスがあるメルボルンは、「世界で最も住みやすい街ランキング」で2位に選ばれたこともある都市。またモナシュ大学はオーストラリア研究重点6大学の1校であり、在学生数8万6千人(内2万人以上が留学生)が学が国際色豊かな大学です。

参加条件

- 対象者: 学部1～4年生(工学部、基礎工学部、理学部)
- 研修費: 約53万円(授業料・航空券・宿泊費・食費・保険料込み)
- 奨学金支援: 14万円(ただし人数・支給規定あり)

UC Davis 研修内容

現地の授業

カリフォルニア大学デービス校 Davis



研究発信力の強化に重点を置いたアカデミックなプレゼンテーションスキルを指導。参加者自身の研究スライドを用いることで、研究の効果的な発表方法や知識を実践的に学ぶ。プレゼン以外にも、発言方法やリスニング、理工系トピックスに関するディスカッションなども受講。座学以外にも企業訪問や研究室訪問、現地大学生との交流会など、アメリカの社会や文化に触れ、学びを深める機会も用意されている。

ベイエリア研修 San Francisco



サンフランシスコへ移動し、シリコンバレーやベイエリア地域で活躍されている方々の企業や理工系施設へ訪問、交流を行う。世界を舞台に活躍している方との交流を通じ、進路選択・検討に対してより広い視野での考えや動機への触発を促すことを目的としている。

ホームステイ

デービス滞在中はホームステイ(2食付き)。ホストファミリーや同宿の他国留学生、地域の人々と交流することが出来る。デービスの住民の約半数が大学関係である大学街で、治安がとても良い。小さな町なので自転車があればデービス市内はどこでも行ける。ワインで有名なナババレーの近くでもあるため、ワインを試飲しながら受ける授業も！

参加条件

- 対象者: 大学院生(工学、基礎工学、理学、情報科学、生命機能研究科)
- 研修費: 約58万円(授業料・航空券・宿泊費・食費・保険料込み)
- 奨学金支援: 16万円(ただし人数・支給規定あり)

オンライン研修

2020～スタート

「Monash研修」と「UCDavis研修」をベースに、オンライン授業に再構成された研修。現地とリアルタイムでつながるリモート授業と、自分の好きな時間に学べるオンデマンド授業の2種類がブレンドされている。現地へ行く留学と異なり、日程・時間の融通が利かせやすいことが特徴であるため、講義や研究活動との両立が可能。費用に関しても、実留学よりも低額で提供されている(18～30万円程度)。バーチャル留学という新しい形の研修である。※実施の有無や日程については事前の確認が必要。



自分の英語力にあったクラスに配属されること、またオーストラリアとのリアルタイム授業でしたが時差がほとんどなかったことで、普段の生活リズムで授業が送れるという点でこの研修に惹かれました。僕が入ったクラスは日本人が4人、中国人が10人と出身国に近いこともあって、皆すぐに打ち解けて仲良くなりました。また、日本の文化について興味がある学生が多く、授業外でも英語を使ってアニメや音楽について話しました。どの生徒も英語を学ぶ姿勢が意欲的で、その影響もあって僕もとても能動的に授業を受けられました。現地の先生はとにかく明るく、常に笑顔だったので楽しく学ぶことができました。オンラインなので会話するのが少し難しいことがありましたが、それでも僕が言おうとしたことをうまく汲み取って解釈してくれたのがとてもよかったです。1カ月で英語を完璧にマスターすることはできませんが、自分の英語が相手に通じるという自信と、どうすれば自分の知っている単語で思いを伝えられるか考える力がついたと思います。また、今後さらに自分の英語力を伸ばしたいという意欲も強く湧きました。

(工学部 環境・エネルギー工学科 高尾悠介)



この研修に参加する前からある程度英語を勉強していたのですが、実際にネイティブの人と英語で喋る機会というのがほとんどなく、自分で勉強してきた英語でどこまで通じるのかを把握するために、私はこの研修に参加しました。授業は午前8時～12時の1日4時間のクラスで、主に発音の練習や個別グループに分かれてのプレゼン練習などを行っていました。またこれらの授業に加えて課題も一定量あったため、2週間でしたが英語の世界にどっぷりと浸かることができました。さらにこの研修では実際にUCDの学生とオンラインで話せる時間もあり、現地大学生と交流することで彼らと意見交換をできたというのが私の中でとても印象に残っています。今でもこのそこで知り合った学生とZOOMなどを通して話したりするのでとてもいい機会になりました。文化の違いとしてアメリカの人はよく喋るので、とにかく自分から主張をしていかないといけないという所も面白いなと思いました。そして私はこのオンライン研修を通して、より実際に海外への長期留学に行きたいという気持ちが強まりました。

(工学部 地球総合工学科 廣瀬優太)

Column

留学中のリアルVoice

留学に行く想定していなかったことがおきたり、行って初めて知ることがたくさんあります。先輩達が実際に体験したこと、感じたことを語ってくれました。

ハプニング編

- 初日、大学に着いてから寮に行くのと寝るためのベッドはあったがその上に引く布団がなかった。まず布団を調達することから始めなければならず、現地でチューターの先輩に聞いてみると、「板の上でそのまま寝ているから布団がどこに売っているかわからない」といわれかなり絶望感に打ちひしがれた。結局、自分で近くの生活雑貨のお店に行って調達したが、探すのが結構大変で、しかも雨が降ってきて背中に抱えて持ち帰った。また、ネットのつなぎ方なども全くわからないし、生活環境が整うまでの2～3日は本当に日本に帰りたと思った。

(マテリアル生産科学専攻 A.H.)



食事編

- インドネシア料理の屋台メシがとても美味しかった。しかし基本的に辛めの味付けなので、「Jangan Pedas (辛くしないで)」という言葉を知得した。
- 宗教によって食べられないものが決まっている友人ができてから、メニューや、相手の飲食するものに注視するようになったことは、些細だが自分にとっては大きな変化だった。
- トボラの収穫祭で買ったリキュールを買って寮の床に置いていたが、ある日帰ったら爆発していた(おそらく追い発酵という現象)。

(マテリアル生産科学専攻 T.M.)



文化編

- イタリア、その他欧米諸国において、「調子はどうか?」、「週末はどうだったか?」と挨拶のように尋ねる文化がある。日本では一般的ではないが、海外において非常に一般的で重要なものであり、慣れてしまえば会話を始めるのに非常に便利なフレーズだった。
- 各国生徒のハングリー精神さ、向上意欲、中国人学生の優秀さ・数の多さ・集団行動に驚いた(多くの留学生は自国経済が悪い、イギリスでの就労ビザを取るために必死であった)。特に中国人は優秀で、UCLで最も優秀な学生層は中国人だったように感じた。
- ベトナムで街を歩いているときに現地の学生が、冗談を交えながら値引き交渉をしている様子が大阪の下町っぽさを感じた。人と人との距離が近くて温かく、驚きと同時に懐かしさを覚えた。

(機械工学専攻 T.T.)





Name 川口 太郎

Major 工学研究科
機械工学専攻

2016年 モナシュ理工系夏期研修 修了生



ハノーファー支庁舎前にて
休日には多くのドイツの名所を訪問しました

目標設定の仕方で 得られる経験の大きさが決まる

2019年9月に私はドイツのブラウンシュバイク工科大学の研究室を訪問し、3週間現地の研究者と共に研究活動を行いました。これは現在所属している超域イノベーション博士課程プログラムの「グローバルエクスプローラー」という科目の一環です。規定の範囲内で費用補助を受けながら、キャリアデザインのためのプランを立て、例えば国内外の企業や大学の訪問をさせてもらえるという科目でした。

私がドイツへ研究留学をしようと思った理由は、交通システムの統合が進んでいる、欧州の最先端の研究と実装段階における現状の把握をしたかったからです。ドイツは言わずと知れた自動車大国ですが、現在、路面電車やバスなどの公共交通機関とカーシェアリングの組み合わせによって自動車離れが発生しています。もはや自動車を所有することがステータスではない時代が到来しつつあり、これは日本でも同様です。このような状況で将来的な都市の交通システムをどのように設計していくべきなのか、自動車会社としてどのような決断をすべきなのかを現地の研究者と議論しました。ドイツでは基本的に企業との連携を通じて研究を進めるので、そのようなノウハウが多いのです。結果として留学は上々なものになったと感じています。現地の先生方とはディスカッションでき、ドイツ流の研究の進め方を経験でき、共同で研究をしようという提案をいただくなど、出発以前では考えられない成果を上げることができました。

また留学の準備の段階でも大きな経験ができました。この留学は基本的に自分で活動をコーディネートするものであり、現地での宿泊先や航空チケットの手配、研究室へのアポイントメントなど、全ての事柄を自身で準備しました。私はこれまでいくつかの留学プログラムに参加しましたが、活動全てを一から自分で準備したことはなかったので、貴重な経験ができたと思います。

一方で、単身海外にいることへの寂しさや英語で意見を伝える難しさなど、いくつかの困難にも直面しましたが「これもいい経験になっている」と思い直し、乗り越えることができました。休日には気分転換として観光もしました。ドイツの自動車会社の博物館は見応えがあり、おすすめです！

私が思うに、多くの人が留学で直面するのは、「文化の違い」と「言語の壁」です。これらは「留学はハードルが高い」と感じている方々が心配していることだと思います。一方で、それは自分の視野を広げてくれる絶好の機会なのだと思います。自分はまだまだ知らないことがある。これに気付くことが留学の醍醐味なのではないでしょうか。また、留学の際には目的をしっかりと持つことも重要です。私の経験上、目的をしっかりと持っている人は、そうでない人と比べて、多くの経験を持ち帰っていると感じています。私のドイツへの留学も、これまで以上に強い目的を持っていたからこそ上手くいったのだと思います。今後、留学を検討している学生たちにはこの点に留意して活動し、自分がこれまで知らなかった世界を体験してもらいたいです。



✈ Study Abroad Information

博士課程教育リーディングプログラム

ブラウンシュバイク工科大学 (ドイツ)
2019年9月 (3週間)
留学時：修士2年生

費用内訳

- 渡航費：約15万円
- 活動費：約35万円 (ホテル、食費など)

- 上記金額分をプログラム提供の予算から補填 (予算額については年度毎に検討)

Name 熊谷 康平

Major 工学研究科
応用化学専攻



白衣と実験眼鏡は徹底

合同シンポジウムにおける
ポスター発表

博士課程の仲間達との
交流は刺激的

憧れの研究室で学んだ 大切なこと

私は、所属するインタラクティブ物質科学・カデットプログラムの活動の一環として、メルボルン大学で3カ月にわたって最先端のナノ材料に関する研究を行いました。留学先を考えるにあたり、日々の化学実験を支えるスキルの向上に加え、得られた実験結果を物理的な視点で考える力を養える環境を重視しました。このことを念頭に、多くの論文に目を通すうちに、自分の研究分野で世界トップ10に入る権威ある先生がメルボルン大学に知り、そこで世界レベルの研究者たちと交流したいと強く思うようになりました。しかし、留学希望先と自身の所属研究室との間には共同研究等の繋がりが何もなく、留学受け入れに関する交渉から始める必要がありました。この際、学生が主体となり運営を行った国際シンポジウムにて、海外からの研究者の選定・講演依頼が主業務である渉外部会のリーダーを務めた経験が大いに役立ちました。海外では、面識のない学生からのメールはスパムとして捉えられることも多く、返信してくださる先生は稀であることを身に染みて感じていました。そこで、留学希望先の先生とコンタクトがあり、間に立ってくれそうな日本国内の研究者を探し出すことを最優先に行いました。

無事にメルボルン大学の先生と連絡が取れるようになってからは、留学に対する熱い想いに加え、自身が持つスキルを最大限アピールすることで、無事に研究者としての留学を受け入れてもらえました。その後、先方の事務の方と宿泊先や授業料 (研究費等) に関して細かい調整を行い、憧れの研究室に行くための手続きを着々と進めていきました。

留学先では、平日は9時半から18時半ぐらいまで研究室に滞在しており、様々な分析装置を利用したナノ材料の特性評価を主に行っていました。日本にいる時と同様に実験自体は基本的に一人で進めていたものの、様々な専門性を有する研究者たちとディスカッションする機会が十分にあり、異分野の融合によって科学技術を発展させる上で非常に恵まれた環境であると痛感しました。

一方、試薬の納期が遅れることが多く、一人ひとりが実験を行うための設備も十分に整っていなかったため、設備環境に関しては阪大のほうが充実しているという印象を受けました。世界中から集まった博士課程の学生がメルボルン大学には多く在籍しており、国籍という垣根を越えて彼らとこれまでの研究人生や夢に関して熱く語り合えたのも、素晴らしい経験でした。

留学を通して学んだことは、自身のアイデアを大切に、衝突を恐れずに活発な議論を行うことの重要性です。私は英語にそれほど長けてはいませんが (TOEICは650程度)、周りの人々が熱心に耳を傾けてくれたおかげで比較的スムーズに会話をすることができました。中でも、日本で過ごすうちに自然と培った知識や経験を研究室のメンバーと共有した際に、目から鱗が落ちたかのような反応をしてくれたことは今でも忘れられません。留学前は少数の批判的な意見を必要以上に深刻にとらえ、自信を失いそうになることも多々ありましたが、文化の異なる様々な人々との触れ合いを通して、自身の強みを再発見することができました。私たちが阪大で学んでいることは、世界的に見ても非常に価値があることなので自信を持ってください。皆さんが新しい環境に飛び込むための支援は既に整っています。学生の間にチャレンジしてはいかがでしょうか。



✈ Study Abroad Information

博士課程教育リーディングプログラム

メルボルン大学 (オーストラリア)
2019年9月~11月 (3カ月間)
留学時：博士2年生

費用内訳

- 渡航費：15万円
- 住居費：15万円/月 (寮) 朝・夜ご飯付き
- 生活費：約10万/月

- 上記金額分をプログラム提供の予算から補填



Name 佐藤 安里瑛
Major 工学研究科
生物工学専攻

日本とインドネシアの 架け橋に



地元の学生にITBのキャンパスを案内してもらいました

DDPを選択した理由

私がDDP(Double Degree Program)に魅力を感じたのは日本の大学に在籍したまま留学ができることと、同時期に阪大と海外の大学の学位がそれぞれ取得できることでした。更に、将来は研究職に就きたいと思っていたので、専門性を増やしたいと考え、阪大の工学研究科では分析化学の実験を行い、留学先のバンドン工科大学(ITB)では理学研究科で発酵食品の微生物研究をしました。このように、分析化学と生物の両方の領域の知識を得られることがとても大きかったです。また、私は幼少期から高校卒業までアメリカで育ったため、英語圏ではない国で生活してみたいと強く思っていました。特に今後日本企業が深いかかわりを持ちそうな東南アジアに興味を持っており、研究室の教授からDDPという制度があり、インドネシアに留学ができると教えていただき、入学することを決心しました。

ITBと阪大を行き交う3年間

私が入学したDDPでは修士論文を2本書き、修士論文発表も阪大とバンドン工科大学それぞれでおこなうため2回することになっています。研究内容は被っている箇所もありますが、基本的には違う実験を行い、修士論文のタイトルも異なるものを提出するので倍以上大変です。阪大だけの入学であれば通常、修士号は2年で取得できますが、DDPは3年かかります。バンドン工科大学には合計2回行きました。1回目は主に授業の単位を取得すると研究のデータを集めることでした。2回目は修士論文発表のために渡航しました。バンドン工科大学での修士論文発表は2019年の冬に終えましたが、とてもハードルが高かったです。発表時間が30分、質疑応答は1時間以上あり、通常の日本の大学の修士論文発表と比較したら長いかと思います。想像以上に合格ラインも厳しく、修士号を取得するのに準備がたくさん必要でした。しかし今思えばこのことは自身の研究に対して向き合う良い経験になったと思います。

	M1	M2	M3
4月	大阪大学 授業・研究	大阪大学 研究 ITB修論準備	就職活動
5月			
6月			
7月	ITB 授業・研究	ITB 修士論文発表	大阪大学 研究・修論準備
8月			
9月			
10月			
11月	大阪大学 研究	大阪大学 研究・中間審査	修士論文発表
12月			
1月			
2月			
3月			



阪大のITBの留学生とインドネシア料理について話しているところ



一週間に一回、地元の小中学校へ日本語を教えに行っていました
留学先のバンドン市では、日本人を見かけるのが珍しく、たくさん話しかけてもらいました

ITBの生活スケジュール

DDPの学生として留学した場合、留学先では地元の学生並みに勉強をする必要があり苦労しました。私の場合、週6コマの授業と週1回の実習が入っていました。しかも授業は1コマ2時間あり、日本の大学の授業時間より長いのです。更に、毎週課題も出されていたので、授業の後は復習も必要で、平日は授業、実習、実験と帰ってからの予習に時間を使っていたあまり余裕がなかったです。

授業だけではなく自身の研究も進めていかなければならなかったもので、平日授業がない時間は研究に時間を使っていました。しかし、日本の大学のように研究室に「コアタイム」がなかったため、実験が必要な時は研究室に行けばよく、スケジュールは立てやすかったです。

1週間の生活				
	平日			週末
午前	授業	実験		自由
午後	授業	実験	自由	観光

ダブル・ディグリー・プログラム(DDP)とは

ダブル・ディグリー・プログラム協定等に基づき、同時期に大阪大学と海外の協定校に在籍し、両大学で実施する連携した教育プログラムを学修したうえで、それぞれの大学から学位が授与される制度。協定により学位取得に必要な要件が違う。

Study Abroad Information

ダブル・ディグリー・プログラム

バンドン工科大学(インドネシア)
留学時: 修士1~2年生

費用内訳

- 渡航費: 8万円
- 住居費: 5万円/月(アパート)
- 生活費: 3万円/月
- 奨学金(留学時のみ): 15万円/月+渡航費(NSK財団)

インドネシアでの暮らし

留学先の生活については、まず一般人には思ったより英語が通じなかったため、インドネシア語の勉強をする必要がありました。例えば、スーパーで買い物をしたり、交通機関で移動する際はインドネシア語が必要でした。個人的に良かったことは、私はインドネシアの天候が好みでした。赤道に近いインドネシアは1年中夏の天候で、とても過ごしやすかったです。更に、インドネシア人はみんなとてもフレンドリーで、見知らぬ人でもすぐに声をかけて助けてくれます。なので、インドネシア語を話せなくて困っている時も翻訳機を使う等してコミュニケーションをとろうとしてくれました。また、バンドン工科大学の教員の面倒見もとてもよかったです。学業関係に限らず、空港まで迎えに来てくれたり、スーパーに連れて行ってもらう等、私生活のサポートもして頂きました。週末は友人と地元の観光にもよく行きました。



同じ学科の友達とカフェタイム



初志を果たすために 突き進んだUCL

私は三重県伊賀市という小さな町で生まれ育ち、地場メーカーに勤務していた父親に育てられました。小さな町にある会社に勤めながらも、毎月のように海外出張を繰り返し、世界を相手にしていた父は私にとって誇りであり、私は高校生のときから「父が働くような地方の企業が国際舞台で活躍することに貢献したい」という“想い”を抱くようになり、旧帝大で唯一外国語学部を有するなど国際色豊かな大学である大阪大学の工学部に入学しました。しかし、私が在学中(2010年4月～2014年3月)は、所謂GAFAの台頭が本格化してくると同時に、中国や韓国などのメーカーが勢い付くようになり、相対的に日本の企業がグローバル市場において苦戦しているような報道が目立つようになりました。ただし、自分なりに様々な報道を分析したり、日本の基礎技術の高さについて講義等を通じて学ぶ中で、私はある仮説を抱くようになりました。

「日本の企業は、技術力が高水準であったとしても、海外企業と比べると国際的な経営戦略といった技術以外の要素や、外交的な要素や政策等の理由などで苦戦をしているのではないか」

この仮説が日本の抱える課題の一つであると確信に近い考えを持っていた私は、将来的にこの課題を解決したいという“熱意”を抱くようになり、自分の進路を考える上で、研究開発者としての道ではなく、企業が抱える国際的な経営課題を解決するための仕事や政策に関連した職業に関心を持つようになったと同時に、国際的な課題を解決できる人材になるには、まずは自分自身が国際経験を身につけるべきではないかと考えるに至りました。そこで「海外の大学院に進学し、ファイナンスなどの経営に関与するようなコースで学ぶことは、上記課題の解決の近道になるのではないか？」と考え、海外の大学院進学を志しました。海外の大学院進学を志すようになってからは、英語力を身につけるために阪大の留学生と毎日のように交流しました。留学生を京都等へ観光案内に連れて行った他、身の回りの世話、日本人の学生との交流イベントの運営など様々な活動を行いました。「英語を勉強する」という感覚では長続きしません「留学生の友達と交流する」という感覚であれば毎日でも続けられます。阪大はとても国際色豊かな環境であり、その環境下で日々留学生と過ごしていたら、いつの間にかある程度まで英語が喋れるようになりました。

大学卒業後に進学したUniversity College Londonの Engineering with Finance MSc では、周りの意識に圧倒されました。英国大学院に留学している生徒は、英国での就労等も企図していることから、とても高いハングリー精神と向上意欲を持っております。また、アジア圏の学生は「周りのみんなが英米豪の大学院に進学するから私も進学した」と言い切るなど、大学院留学をすることをある意味「当たり前」のように捉えている節がありました。また、英国大学院のStanding on the Shoulders of Giantsという考え方に強く感銘を受けました。大学の研究は文献調査をすることが当たり前とされていますが、英国ではその文献調査の重要性が更に強い印象です。適切な引用方法で、関連する過去の調査を十分に文献調査し、そこから自説を導かないと、たとえどんな小さなレポートであっても一切評価されないというのが英国大学院の基本的かつ厳粛な方針でした。

ただし、決して過度に海外の大学を恐れる必要はないと思っています。学部時代、期末試験前に私を助けてくれた友人たちや、大学院試験免除の優秀な友人たちとは異なり、私は成績の観点から言えば、平凡な学生だったと思います。そんな私ですら留学することができたのですから、他のアジア圏の学生のように、留学することを「当たり前」と捉えれば、恐れることは何も無いのだと思います。

私は現在、政府系の金融機関に所属し、日本企業に対する投融資業務に従事した後、現在は地域活性化に関する政策提言を意識した各種調査などを行っており、日々、英文も含めた文献調査および自説を導くことを行うとともに、昨年度は調査の一環で海外の現地企業経営者への英語でインタビューを実施するなど、留学時代に培った経験が活きています。また、「地方の企業が国際舞台で活躍することに貢献したい」という“想い”を忘れず、学部時代に抱いた「日本企業の国際的な経営戦略」や「政策等」といった課題解決に貢献したいという“熱意”をそのままぶつけられるような最高の環境にいて感じております。皆様も、自らが抱えている“想い”や“熱意”に従って、留学という選択肢を活用することで、自己実現を果たすことができるのであれば、私も阪大の卒業生の一人としてとても嬉しく思います。



オーストリア、インド、インドネシア、ギリシャ人メンバーと製品開発とプレゼンを行った時の様子

工学部の先輩たちが

留学に行くまでにしておいたこと



POINT
1

単位とGPA

留年をせずに留学に行くためには、大学1年生の時から履修可能な授業は全て履修し、少しでも多くの必要単位を取得しておくこと。

(地球総合工学専攻 T.M.)

学部の授業等で良い成績を取らないと海外留学はできない。阪大はGPAが公表されていないが、海外留学をする上ではGPAが重要視されるので、まずはしっかりと目の前の授業等に取り組む。

(応用理工学科 T.A.)

POINT
2

履修と研究計画

研究室に配属される前から「留学したい!」という気持ちをコース長や、配属希望の研究室の教授に話して早めに相談することが大事。協力してもらえる環境づくりは必須。

(マテリアル生産科学専攻 A.H.)

勉強や研究と留学の兼ね合いを確保できるような履修や研究計画を立てたうえで、先生に納得してもらえる説明ができるように念入りに準備をすること。

(環境エネルギー工学専攻 S.Y.)

工学部の先輩たちが

留学で身につけた力



POINT
3

語学力

理系を専攻している人々は、自分の学問が普遍的であることの強みを意識した方がよいと思う。英語は役に立つという結論では味気ないが、それは少なくとも事実であり、最先端の論文は英語で掲載されるし、一流の研究者やエンジニアで英語ができない人は聞いたことがない。また、日本/海外に関係なく、文理の壁は意味がなくなってきているので、英語で所謂文系のような歴史や文化、政治といった話ができると尚よい。

(地球総合工学科 S.S.)

POINT
4

コミュニケーション能力

各自が自分と同じ国籍や専攻を有するメンバーが全くいないグループの中において、全員が多様性を構成する要素の一つであることを理解し、主体的に意見を発信することで、1人ひとりでは決して思いつくことができない結論に達することができた。そのためには、誠実にグループワークに取り組むことも必要だが、ワーク外でのコミュニケーションそのものや、これを楽しくすることで良い雰囲気を形成していった体験を得ることができた。

(機械工学専攻 T.T.)

人をつなぐ、世界をつなぐ、みんなの夢をつむぐ



寺前 拓馬

工学研究科 機械工学専攻

- 渡航国:ベトナム
- 受入企業: IHI INFRASTRUCTURE ASIA CO., LTD.
- 現地参加学生の大学: ハノイ工科大学

岡崎 祐樹

工学研究科 環境エネルギー工学専攻

- 渡航国:インドネシア
- 受入企業: PT. Cilegon Fabricators
- 現地参加学生の大学: インドネシア大学

大門 岳

工学研究科 地球総合工学専攻

- 渡航国:ミャンマー
- 受入企業: J&M Steel Solutions Co., Ltd.
- 現地参加学生の大学: ヤンゴン工科大学

カップリング・インターンシップ(CIS)対談

一企業インターンにはないCISの持ち味

岡崎: 修学旅行以外で海外に行ったのはCISが初めてやってんだけど、二人はどう？海外とか英語を使うとか、慣れてたほう？

寺前: 一度、研究室を訪問するためにヨーロッパに行ったことがある。そのとき、良い意味でも悪い意味でも、自分がグローバルの中でどれぐらいの人間なのかというのが分かった気がする。だから今回は、英語に慣れるとかそういうんじゃない、日常的に外国語を使うのが当然という“世界の入り口”に立つことができる環境で、力試しをしてみよう、と。

大門: 僕はバックパッカーで東南アジアほぼ全制覇って感じ。けど、ミャンマーだけまだだったのと、旅行で行くのと留学で行くのでは違う経験ができるかなあって思ってエントリーした。ほら、ビジネスとかインターンみたいな形なら、自分が苦手なところでもちゃんとやらなアカン状況になるやん？それがいいかなと思って。

寺前: インターンといっても技術習得が目的じゃないんだよね。IIAベトナムの工場を訪ねたとき、溶接とか金属のガス切断とかやらせてもらったけど、あくまでその会社を理解する、どういう人が働いているのかを理解することに重きが置かれているんだと理解した。日本人であれ現地の方であれ、あるいは理系であれ文系であれ、それぞれどういう思いをして働いているのかを肌感覚で知り、それを課題に取り組む下地としていくのがプログラムの意図するところだと思った。

大門: 国内の事前研修で考えていた仮説と、現地で体験したことって、結構ギャップがなかった？ミャンマーの研修先はトップが日本人、スタッフは現地の人という日系企業だったので、「指示がちゃんと行き届いていないのではないか」という予想を立てたんやけど、行ってみたら現地スタッフさんは日本語がうまくて、上からの指示がキレイに

伝達されていてビックリした。ほかに、先進国に比べたら狭い工場に、部品や道具が散乱してて不衛生で……なんて想像していたのに、実際は清潔で危険管理もばっちり。失礼なイメージを勝手に抱いてたんだと反省したよ。

一マインドセットを変えるしかない！

大門: この国を訪問したチームも「大阪大学・理系＋文系」と「現地大学・理系＋文系」の4人編成だったよね。インターンシップ先で業務をお手伝いさせてもらう中で、自分たちのテーマに対するヒントを掴み、訪問から戻った後に学生同士でああでもないこうでもないかと揉むのが楽しかったな。やりとりはすべて英語だし、ディスカッションの進め方も普段の研究室とは要領が違ってて難しかったけど、個々の意見が異なっても議論から逃げずに一つのものをつくり上げていこうという姿勢は自分でも良かったと思っている。



岡崎: 僕のチームは、現地理系の子が直前にキャンセルして、阪大文系の子まで途中で体調不良になって5日間ほど戦線離脱。それで、現地文系の女の子と2人だけになったときは完全に心が折れてしまったな(笑)

大門: 2週間のうち5日間はデカいな。

岡崎: そうなんよ。今までのグループディスカッションでやってきたことをいろいろ試したけど通用しないし、しかも部屋に男女2人だけなのはマズイっていう宗教上の事情も絡んできて……。なかなか議論が進まなくて、付き添いの先生に「これは無理かもしれません」って正直に相談したら「時間が解決するものじゃないから、もう岡崎君が変わるしかない」ってアドバイスされて。次の日から恥じを捨てて、英語を流ちょうに話す留学生を演じたり、冗談を言って彼女の笑いを誘ったりして必死に議論を進めたなあ。日本では聞き役に回ることが多かったのに(笑)

寺前: 自分の殻を打ち破ったんや。

岡崎: おかげで、語学力に対する不安なんか大した問題じゃないってわかった。肝心なのは、とりあえずやってみようという気持ちと伝えたいという熱意。それさえあれば、絵を描いたりパワーポイントで資料を作成したりと、いくらでもやり方はみつかった。

大門: ミャンマーチームも代わる代わる誰かが離脱したけど、僕は特別にしんどいと感じたことはなかったなあ。普段から長時間の研究に慣れているせいか、何気にメンタルもフィジカルも強かったのかも(笑)



一現場に立つことで見えてきた実情

大門: 岡崎君と僕のグループは、同じ「コミュニケーションの課題と対策」という実習テーマだったけど、訪問国が違うと課題も解決策も違うのになってすごく気になってて。実際、どうだった？

岡崎: インタビューしてみてわかったのが、インドネシアって日本以上に上下関係が厳しいみたいでさ。部下が上司になかなかモノを言えないでいるうちにコミュニケーションがおろそかになって、モチベーションが落ちて……。その結果、生産のパフォーマンスが悪くなるっていう状況があることを発見してん。事前研修で「コミュニケーションの課題になるものって、やっぱり言語かな？」って話してたけど、もっと踏み込んだこと、たとえば「上司と部下との関係」が一番の課題じゃないかっていうところにいきついた。

大門: 僕もインタビューで生の声にハッとさせられたなあ。学生目線ではコミュニケーションに問題がないように見えただけど、トップの人は「日本人がいなくても、現地のミャンマー人だけで会社を回していけるようになるのが最終目標」と言ってるのに、ミャンマーの人たちは「上の立場に立って責任を持ちたくない」って話してて。だから、直接的なコミュニケーションの課題じゃないかもしれないけど、「主体的に動けるリーダーを育てていくようなプログラムを組む」という最終提案にまとめることにした。寺前君のチームは、「労働意欲における課題とその解決策」がテーマだったよね。

寺前: うん、そう。「労働意欲とworking-motivationって、日本語と英語という以上の違いってあるの？」みたいなレベルから始めたんだけど、ディスカッションしていく中で、ベトナムはすごく家族を大切に作る会社だとわかったので、たとえ日系の会社であってもその点にちゃんと注意を払ってますよという姿勢を示すことが、彼らの労働意欲につながるじゃないかという話に。たとえば、PVみたいなのを社員同士で撮り合って、それを社員の家族と一緒に見るのもいいし、会社のロビーで放映するのもいいし……。調査ではインタビューとアンケートを併用したんだけど、face to faceで訊ねると「生きて家族を養うためにお金が大事」と話した人が、匿名アンケートになると「会社の発展」や「大きな会社に所属している自尊心」がモチベーションだと回答するとか、ちょっと違うことが見えてきて興味深かった。

一異文化コミュニケーションを通じて

大門: たぶん、理系って文系に比べると留学に行く人が少ないと思うけど、もったいないよね。僕は、“みんなと違う経験”をしたことで、人間として視野が広がり、土木工学系以外の会社も選択肢に入れて就職活動できたのがよかったなと思ってる。

寺前: 参加します！と手を挙げたら、(主催者である)接合研の方々が渡航などの事務的な手配をしてくれるので、学生はCISの研修課題に集中できる。それに、個人留学と違って大学を通した留学だと向こうの学生と交流する機会が多いから、観光旅行のガイドブックには載っていないようなローカルで人気の食べ物屋さんを教えてもらったりして、向こうの大学生のリアルが分かってくるのもイイところ。

岡崎: 高校生までやと受け身でいても情報が集まってくることがあったけど、大学生になったらもっと情報に貪欲になって、思わぬところに転がってる知らないことを拾っていく視点を持たないと！って、しみじみ感じる。

寺前: いろいろ不安はあるかもしれないけど、院生って自分でも気がつかないうちに課題解決能力が付いてるから、学部生の頃より心理的なストレスに強くなってるのがする。留学先では、どこから手を付ければいいのか分からん問題を、まだコミュニケーションが浅い仲間たちと一緒にキックオフしていかなアカンことがいっぱいあった。でも議論が盛り上がってきたときに、よりリーダーシップをとれる立場になったり、よりいろんな角度から意見を出せたりしたと感じて、それは社会に出ても役立つんじゃないかと。

岡崎: インターンシップを通じて、異なる言語・文化・常識が存在する環境で「相手を尊重できる人」がグローバルに活躍できるんだと強く感じた。CISは、それを体感するためには最高の機会、その経験をさせてもらった大阪大学には本当に感謝しています。



接合科学研究所主催プログラム

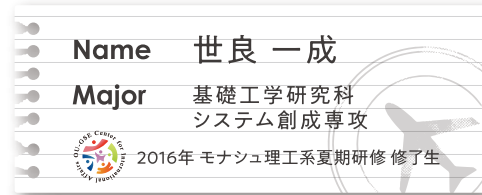
阪大生(文系2名、理系2名)と海外提携大学の学生(文系2名、理系2名)の各8名が、日系の製造業企業にて約2週間の日程でインターンシップを実施します。就労体験に重きが置かれた従来型のインターンシップとは異なり、世界の舞台で真のリーダーシップを発揮できる研究者、技術者、管理者の人材となるべく、「事前研修・企業実習・文化体験・最終報告会」の4行程を合宿形式で行います。言語や文化が異なる状況で、学問分野の異なる学生同士が協働を行いながら、課題解決能力やコミュニケーション能力の向上を目指す実践型の研修です。

詳細はこちら





進路を決める手がかかりとなった 実りある1年間



今まで見ていなかった視点を得るために

私にとって1年間の留学は、留年などのデメリットよりもメリットが圧倒的に大きかったです。

ヴルカヌスの応募を本格的に考えたのは学部4年のはじめでした。当時、エンジニアとして自分のキャリアを歩んで行きたいかどうか疑問を抱いていました。また日本に閉じず、グローバルに働きたいとの考えもありました。そんな気持ちがヴルカヌスへ応募するきっかけでした。

ヴルカヌスの経験から、世界のどこでも働いていけるようになるようになりました。進路を考える際、日本国内に留まらず海外で働くことも自然と選択肢に入れられるようになりました。また、自分はエンジニアとして技術開発を行うより、技術を事業化していくような仕事に興味あると気づくことができました。その他にも、実体験を通じて多くの学びがあり、キャリアに限らず、異文化理解など様々な側面で大きく視野が広がった1年でした。

イタリア語が話せないと生きていけない！

語学研修は、平日9～12時頃までで、基本的には個別レッスン、週に1～2回程度のグループレッスンを行っていました。特に個別レッスンでは質問を自由に行え、イタリア語の学習に適した環境でした。また、日常生活のほとんどをイタリア語で過ごしていたため、授業で学んだことが生活に直結していました(近くに米軍基地があり、グループレッソンの生徒は、ほとんど米軍人の妻でした。他ヴルカヌス同期生達は、多くの留学生と授業を受けていたようです)。

ホストファミリー含め周囲に英語話者がいない中、私は渡航直後ほとんどイタリア語が喋れなかったため、コミュニケーションをとるのが難しかったです。土地柄ゆえその他にも困難なことがありましたが、精神的にタフになり(生きていくために)語学力も向上しました。ポルデノーネはローカルなイタリア文化を体験できる良い町でした。

体感で知ったヨーロッパの職場環境

職場では、上下関係はあまり重視されず、年齢や役職の違いが大きくとも意見が自由に言える環境でした。研修開始当初、会議や日常会話において私は「空気を読もう」としてしまい、発言の機会を逃してしまう時がありました。語学力も原因の1つではありましたが、より積極的に発言する必要があると実感しました(業務中の使用言語は主に英語で、雑談等はイタリア語で行っていました)。

一般的にイタリアでは、1日3回(午前・昼食後・午後)のコーヒープレイクの習慣があります。リフレッシュし作業効率を上げるだけでなく、ミーティングでは話しやすい小さな問題について相談することができるため、素晴らしい文化だと思いました。その他、子供の送り迎えのための時短勤務や、繁忙期以外は長期休暇の取得が可能など、私生活が尊重されていました。一方で、コーヒープレイクや昼食は同じチームのほぼ全員で一緒にと取るなど、団体としての関係性も重視されていました。一概には言えませんが、ヨーロッパの人々には幸せに生きるために仕事するという考え方が根底にあると感じました。

インターン先での刺激的な毎日

研修先であるElectrolux Professionalは主に業務用家電を製造する大企業です。私は「業務用オープンの組み込みシステム開発」および「アームロボットのマニピュレーションに関する研究開発」の2つのプロジェクトに携わりました。

開発に携わった業務用オープンは、調理対象に応じて時系列的に温度や湿度を自動制御する機能や、調理後の自動洗浄機能等を持つ大型オープンであり、組み込みシステムは複雑でした。オープンのシステムは、様々な機能が有機的に作動していたため、自分の担当開発領域だけでなくシステム全体を把握する必要がありました。また、プロフェッショナル向けの高品質な製品が求められ、ソフトウェアとしてのシステム安定性だけでなく、ハードウェアの耐久性も考慮したシステム開発が求められました。現場ではModel-Based Design(MBD)と言う開発手法が用いられており、MBDに関する設計ツールや概念を新たに学びました。

オープンは研修先企業の主要製品であり、開発にはソフトウェア、ハードウェアの両領域に多くのエンジニアが携わっていました。また、イタリアだけでなく世界中の国々出身の同僚がいました。そのため製品開発において、専門領域だけでなく文化的価値観が異なる人々とコミュニケーションをとる必要がありました。研修開始時は、意思疎通の齟齬による問題が生じることもありましたが、異領域・異文化理解を深め、会話のスタイルを工夫することで円滑にコミュニケーションが取れるようになりました。

アームロボットの研究開発は、新規立ち上げのプロジェクトでした。そのため、主にシミュレーションの環境構築や、センサ情報の処理など実環境でのタスク実行のための統合的な処理を行うシステム構築に携わりました。プロジェクトは小規模なチームでのスタートで、ほとんどの物事をゼロから進める必要があり、社内に前例がなかったため、個人としても主体的にプロジェクトを進めていく必要がありました。

企業研修全体として、新たな環境で新たな知識を身に付けながら、バックグラウンドが多様なチームメンバーと協働し、プロジェクトを遂行するのは困難でした。しかし、同時に多くの学びがありました。実際の製品開発を経験したことで、大学で学んだ学術的な知識への理解がさらに深まりました。また、大規模・新規プロジェクトに携わったことにより、プロジェクトを効率的に遂行するためには、チーム内外でのコミュニケーションやプロジェクトマネジメントが重要であると実感しました。

留学後の変化

留学前はインプットの機会が多かったため、帰国後はアウトプットとしてテクノロジーを活用した社会課題解決について、実践的に学びながら貢献したいと思うようになりました。その一環でベンチャーキャピタルや大学発スタートアップでの長期インターン、産学官連携の地方創生プロジェクト等に参加しました。これらの影響もあり、卒業後の就職先(制御機器メーカー)では研究成果を事業化させる業務に携わる予定です。



会社の友人などと一緒にベネチアの祭りに見に行きました



ヴルカヌス生の同期生がEUの様々な国に滞在しているので現地で一緒に出掛けることもありました。長期休暇等を利用してヨーロッパを周遊しました。



ホストファミリーとクリスマスパーティーをしました



✈ Study Abroad Information

インターンシップ

Electrolux Professional (イタリア)
2018年4月～2019年3月 (1年間)
インターン時: 修士1年生

〈ヴルカヌス・イン・ヨーロッパとは〉
将来の日欧関係を担う若者育成の為に日本の理工系学生を対象とした給付奨学金付きの企業研修プログラム。EU加盟国において4カ月の語学研修および、8カ月の企業インターンシップで構成されている。

費用内訳

- 渡航費: 15万円
- 生活費(ホームステイ費込み): 7,8万円/月

- 奨学金(日欧産業協力センター)
 - ・欧州セミナー受講料
 - ・語学研修中の授業料・宿泊費
 - ・渡航前に航空運賃などの費用として70万円
 - ・企業研修中に現地において6,600ユーロ





Name 守屋 知晃
Major 工学研究科
マテリアル生産科学専攻

自分の付加価値となる 経験を積むために

IAESTEへの参加を決めたきっかけは、私が学部4年の頃、同じ研究室のIAESTEを経験した先輩から、働き出す前に海外経験を積むことができるのはキャリアを考えていくのに良い経験になると勧められたこと、他のインターンシッププログラムに比べて費用が安いということ、何よりも自分の付加価値となる経験になるだろうと考えたからです。そこで、修士1年の春に参加することを決めました。海外で働きたいというよりも、海外でも働ける人間でありたいと思っていました。

実際に参加した所感として、費用をかけずに海外経験を積むにはちょうど良いプログラムだったと感じました。参加したのは修士2年の秋だったので修論の執筆に支障をきたさないよう、実験の進捗計画や修論の方向性については修士2年に上がった時期には準備し、9月には修論の背景の執筆を進めておきました。

IAESTEは企業とのマッチングが必要となりますが、最初にオファーがあった企業にすぐ決めました。別の行き先を探すこともできたと思いますが、材料系かつIT系だったので、ここに決めて良いと考えました。実際の業務は別の企業のサイトから製品データのPDFをひたすらダウンロードする、新品のUSBにソフトを入れ続ける、英語の専門用語を日本語に翻訳するなどで、難しい仕事ではなく、専門用語の訳の際は材料科学専攻のバックグラウンドを活かしてこなれた訳をすることができました。他の従業員とは一緒に仕事をするというよりも、都度仕事をもってきてもらおうと言った関わり方をしていました。他の日本人インターン生はボスニアに出張に行ったり実験をしたりしていたので、仕事内容は行先によってかなり異なっているようです。

休日は主に旅行、市内散策などをしていました。セルビア内の国内旅行では、トボラという小さな町にワインの収穫祭の見物に訪れました。外国に長期で行く機会は少ないと思うので地方都市のお祭りを見に行くのはおすすめです。観光では見られない外国の田舎の姿を見ることができます。仕事終わりや休日に他のインターン生と遊ぶこともなどもありましたが自分は基本的に出不精なので毎回参加したわけではありませんでした。インターン生によってはほぼ毎日一緒に出かけている人もいたようです。



仲間達と映画「ジョーカー」を見に行った

インターン生各自が
母国料理を振るまつた
私が作った唐揚げも好評だった

参加前は、研究室の留学生と英語で簡単な会話をしていたこともあり、英会話もなんとなくかなるだろうと思っていました。ところがいざインターンにしてみると、他の学生は英語を流暢に話せるのは当たり前、第三言語も少し話せるという人がほとんどで、自分のレベルの低さを目の前に突きつけられたような気がしました。2カ月のインターンで英語力が目覚ましく向上するようなことはありませんでしたが、外国の学生のレベルを知ったことが英語力アップのモチベーションにつながったと思います。語学力以外にも、現地では様々な予期せぬトラブルの連続でかなり大変なこともありました。例えば、トイレの鍵は閉まらない、シャワーの温水器は長時間つけっぱなしにすると壊れる、Wi-Fiがない、洗濯機もないので桶で手洗いをするなどサバイバル感にあふれていました。同じアパートのインターン生はさほど気にする様子もなく、それぞれで時間を過ごしたり、一緒にボードゲームをしたり外食したりしていました。しかし、こうして体験記を書いていると色々な思い出が蘇ってきて、行って良かったと思います。

現在は就職し、日系メーカーのエンジニアリング職で海外案件を受け持っています。配属面談でIAESTEの話をしたこともこの配属の理由になっているかと思うので、海外で仕事をしたいと考えている方には特にこのインターンシップをお勧めします。



✈ Study Abroad Information

インターンシップ

Key to Metals AG (セルビア ペオグラード)
2019年10月～11月 (2カ月間)
インターン時: 修士2年生

費用内訳

- 渡航費: 約11万円
- 住居費: 6千～1万円/月 (現地の学生寮)
- 生活費: 3万円/月
- IAESTE参加料: 約6万円
- 受け入れ機関より食費・居住費として: 千円/日

先輩達が実践してきた英語の勉強方法

〈学内のツールを活用する〉

- English Café, Suitaに参加
- ランゲージサポートデスクの利用
- 国際交流科目を受講
- 外国人留学生チューター
- SEEDSのアシスタントスタッフ
- Project HELP

詳しくは
P.39へ



〈独学で英語脳作り〉

- 英文ウェブサイトに記載されている模範解答を写写
- NHKの英会話ラジオ
- 外国語の歌詞翻訳
- 洋画を何度も見て、スクリプトをロールプレイ
- Youtubeのネイティブの英語学習チャンネルで実践的な語彙を覚える
- TEDの視聴



先輩がお勧めする英語教材

「スコアに直結！IELTS徹底対策テキスト&問題集」ナツメ社

- ✓ IELTSの特徴を分かりやすく日本語で説明している
- ✓ ライティング・スピーキングでの採点項目などを解説している
- ✓ ライティングでの文章構成の理論なども解説している
- ✓ 実際に使えるフレーズなども多く掲載

オススメ
1

「Cambridge IELTS 11 Academic with Answers」Cambridge University Press

- ✓ Cambridgeが出版している公式の問題集
- ✓ 解説などは無く、問題と解答が載っているだけ
- ✓ 全て英語
- ✓ ライティング・スピーキングでは回答例を掲載

オススメ
2

「TOEFL TEST必須英単語5600」ベレ出版

- ✓ 各回の内容が専門的で実践的。試験で問われる単語も掲載されている。
- ✓ 一回当たり3分程度で聞く事が出来る。試験に必要な英語のスピードに慣れる事が出来る。
- ✓ いわゆる単語帳とは異なり各パラグラフで出会う苦手な表現や単語を各自でまとめる、自主的な勉強を促すというスタンス。

オススメ
3



工学研究科・工学部

国際交流推進センターへ！

留学について迷ったら



留学を希望する皆さんへ

いつも工学部・工学研究科の国際交流推進センターの活動にご理解いただき有難うございます。工学研究科国際交流推進センターでは、一人でも多くの学部生ならびに大学院生が海外経験をすることを推奨しています。その為には、海外留学や海外インターンシップの機会を提供するだけでなく、学生諸氏の身近な体験談を提供する事も大事な使命と考えます。DX（デジタルトランスフォーメーション）の深化により、海外との交流もより簡単にできる時代へ変化していますが、実体験でしか得られない留学の重要性も益々、クローズアップされています。留学の形態は1つではなく、短期のお試し留学・交換留学・インターンシップ型留学など多様化しています。本冊子には、留学経験者からの体験記だけでなく、留学の方法、海外の生活情報や留学へ行くまでの勉強方法などの盛沢山で具体的な情報を記載しております。是非御一読ください。

国際的な視野をもった学生を育成するため、大阪大学では様々な国際教育を展開しています。今後も新たな国際教育プログラムを展開してまいりますので、是非、ご期待ください。

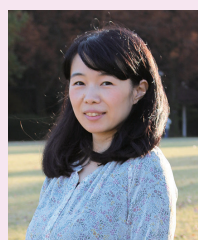


工学部・工学研究科 教授
国際交流推進センター長
藤田 清士



講師
(マテリアル生産科学兼任)
寺井 智之

留学とは外国語や現地の文化を学びたい文系の学生のためだけのものではありません。製造業、情報産業、大学・各種研究機関などで働く理系の研究者、技術者、システムエンジニアを志望する理系の学生こそ、「英語で議論をする」、「論文・報告書を科学的な英語を使って書く」、「顧客・聴衆の前でプレゼンテーションをする」といったコミュニケーションスキル、そして様々な背景を持つ人たちの宗教、文化、習慣や仕事のやり方の違いを知ったうえでプロジェクトをマネジメントするスキルを身に付ける必要があります。これらを身に付けるためには留学に勝る方法はありません。若いうちには留学に勝る方法はありません。若いうちには留学に勝る方法はありません。若いうちには留学に勝る方法はありません。



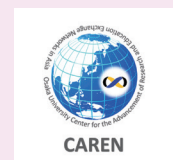
助教
中橋 真穂

「留学」「海外」「英語」…苦手意識のある学生も多いのではないのでしょうか。そんな学生にこそ、ぜひ海外留学をお勧めしたいと思います。学生のうちにコンフォートゾーンを飛び出し、多くの人と交流し、様々な価値観に触れ、英語や海外への苦手意識を少しでも払拭することは、きっとあなたのこれからの人生を大きく変えることでしょう。一人でも多くの学生が留学に挑戦し、将来への可能性の幅を広げることができるよう願っています。ぜひセンターを気軽に利用し、その一歩を踏み出してみてください。



助教
堀 さやか

令和時代、国内においても英語能力はもろんのこと、国際感覚を持った人材が益々求められています。英語が苦手であっても、当センターで開催しているEnglish Caféなどで英語を使って会話をすると、意外に英会話が簡単であることに気が付くと思います。海外留学を経験すると、語学力だけでなく、世界に通用する研究者になるために必要な第一歩となるはずで、海外への憧れがあっても、どうしていいかわからない方がほとんどだと思います。興味のある方は、当センターの扉を叩いてみてください。まだ見ぬ世界への切符を得るには冒険に出てみて下さい。



大阪大学CARENは工・国際交流推進センターに拠点を置いている理工系英語コースの領域横断型国際研究教育組織です。留学生の受け入れだけでなく、日本人学生の海外研修や留学もサポートし、国際舞台での活躍に向けた新たな意欲をかき立てるような魅力ある教育プログラムの構築を目指しています。

URL: <http://caren.eng.osaka-u.ac.jp/>

工学研究科国際交流推進センター(C.I.A.)では
皆さんの目標達成をサポートする
様々なアクティビティを実施しています。

留学相談

皆さんの不安や疑問など、
C.I.A.のスタッフが一緒に考えサポートしていきます。
事前予約などは必要ありませんので、まずは一度ご相談ください！

✉ E-mail: contact_cia@fsao.eng.osaka-u.ac.jp

詳しくはこちらから▶



English Café, Suita

日本人学生と留学生の国際交流の場として、English Café, Suitaを実施しています。
楽しみながら英語を話せるゲームやトークセッションを学生スタッフが毎回考案！
当日の自由参加なので、気軽に留学生との日常会話を楽しめます。

開催ペース

前期：7回、後期：7回(年14回程度)

時間

17～19時、参加無料で軽食あり。

URL: <https://www.facebook.com/OsakaUniversity.Eng.cia/>

Facebookページはこちらから▶



C.I.A. ランゲージサポートデスク

英語ネイティブ講師により、無料で一对一のサポートが受けられます。
「ライティング」「プレゼンテーション」「カンパセーション」の3つカテゴリーから自由によべます！
TOEFL・IELTS受験対策、留学申請書、投稿論文、国際学会発表資料の作成、海外インターンシップ面接準備など、自分の学びたい目的に合わせて英語力を伸ばせます。

時間

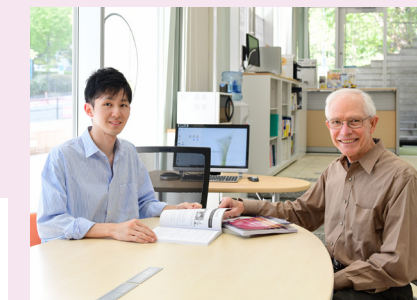
1回45分

開催場所

対面(吹田の学生)、Skype(豊中/箕面の学生)

URL: <http://www.fsao.eng.osaka-u.ac.jp/lang/>

予約はこちらから▶



国際交流科目

大阪大学へ留学している外国人留学生向けの開講科目で、留学生と一緒に英語で授業が受けられます。
海外に行かなくても、キャンパス内で留学体験ができます。
詳細は「海外留学にチャレンジしよう」をご覧ください。

C.I.A教員の科目名 「国際理解入門」(秋～冬学期、吹田キャンパス)

外国人留学生との交流イベント

大阪大学に在籍する留学生の約25%は工学部・工学研究科の学生って知っていましたか？
そんな外国人留学生向けの懇親会を季節の節目(夏祭り、忘年会、もちつき大会など)に開催しています。日本文化と一緒に体験しながら留学生と交流を深めましょう。



図書貸し出し&スチューデントルーム

TOEIC・TOEFL・IELTSなど英語受験対策用のテキストや、留学に役立つ図書を貸し出しています。また、工学部・工学研究科の学生であれば自由に使えるフリースペースも完備しています。留学生と日本人学生が集まれる場所として開放していますので、気軽にお立ち寄りください。

